

泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ

泉南市文化財調査報告書 第二十一集

1990. 3

泉南市教育委員会

序 文

年々増加する開発に対応し、市域での発掘調査も急激に増加いたしております。ただ、これまでは小規模な調査が大半を占めてきましたが、本年度あたりから比較的大きな調査が増加する傾向にあり、市の文化財保護行政にも一つの変革点が訪れているのかもしれない。

しかし、このような状況下でも、調査が増加し拡大することによって幸か不幸か、多くの歴史資料が日の目をみ、市域の歴史はその豊饒な姿を私たち現代人の前にあらわそうとしています。

私たちは、自分たちの郷土にすばらしい歴史があることを誇りに思い、親しみ、そこから多くのことを学んでゆきます。このとき、歴史にふれるたびに、貴重な先人の資産を代償にしていることを忘れずにいたいものです。

当市も来年度で市制施行20周年を迎え、また新たな歴史を刻んでゆくこととなります。この間、本市の文化財保護行政を暖かく見守ってくださった皆様方に、重ねて篤くお礼申し上げますとともに、迎えようとする時代への決意を新たなものにしたいと思います。

平成 2 年 3 月

泉南市教育委員会

教育長 山 田 静 也

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成元年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹を担当者として、平成元年4月1日着手し、平成2年3月31日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、菊敏宏、神沢かずみ、土井憲代、榎本芳子、山口知子、幸前和裕、上林恭一、岩根幹一、田上信一、浦崎初世、前田良子、川野美貴、片山裕子、高瀬雅文諸氏の協力を得た。
また、広瀬和雄、芝野圭之助、武内雅人、森屋直樹、土井孝之、村田弘、佐伯和也、鈴木陽一、三好義三、山田幸弘、谷美光、向井俊生、松本芳郎の諸氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は第1章～第9章を岡田が、第10章を仮屋が担当し編集は仮屋がおこなった。
5. 出土遺物の写真撮影については、岡田があたった。
6. 本調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

凡 例

1. 各調査区には個別の番号をつけている。番号の基本構成は「遺跡名称（記号）－年度一通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、幡代遺跡－HT、岡中遺跡－OK、北野遺跡－KT、岡田遺跡－OKD、海会寺跡－KAI、兎田遺跡－US、仏性寺跡－BSである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。なお、本報告書において調査報告は遺跡別に章ごとにまとめているため、遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は基本的に磁北をあらわしている。ただし、挿図第1～6・11～13・15・16図、および図版PL.1・3では真北を表示している。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+値（*m*）である。なお絶対高の移動はそれぞれ次の水準点から行った。男里・幡代遺跡は大阪府一級水準点466号、兎田遺跡は同464号、北野・岡田遺跡・仏性寺跡は建設省国土地理院水準点262号、岡中遺跡は同263号である。
4. 遺構名称はアルファベットと数列の組合せで表している。アルファベットはSD－溝、SK－土坑、ST－墓、SX－性格不明遺構、pit－柱穴をそれぞれ表す。
5. 遺物実測図には理解をたすけるため各種のトーンを利用している。断面は、須恵器－黒塗り、土師器・陶器・磁器－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーンのように塗り分けた。また、灯明皿などススが付着している部分及び黒色土器はトーンで示した。これらについては図版中で極力凡例を示すよう努力した。
6. 遺物実測図版と写真図版では、遺物番号は統一している。
7. 第5表とPL.1の番号は一致させた。
8. 遺物の出土量などをあらわすのに用いたコンテナは内容積約27.5ℓのものである。

目 次

第1章 調査の経過	1
第2章 男里遺跡の調査	6
第1節 既往の調査	6
第2節 89-1区の調査	7
第3節 89-2区の調査	8
第4節 89-3区の調査	10
第5節 89-4区の調査	10
第6節 89-5区の調査	11
第7節 89-6区の調査	11
第8節 89-7区の調査	12
第9節 89-8区の調査	13
第10節 89-9区の調査	14
第11節 89-10区の調査	15
第12節 88-16区の調査	17
第13節 88-17区の調査	18
第14節 88-18区の調査	19
第3章 幡代遺跡の調査	20
第1節 既往の調査	20
第2節 89-1区の調査	21
第3節 89-2区の調査	22
第4章 岡中遺跡の調査	23
第1節 既往の調査	23
第2節 89-1区の調査	24
第3節 89-2区の調査	25
第4節 88-3区の調査	29
第5章 北野遺跡の調査	30
第1節 既往の調査	30

第2節	89-1区の調査	31
第6章	岡田遺跡の調査	32
第1節	既往の調査	32
第2節	89-1区の調査	32
第3節	89-2区の調査	33
第7章	海会寺跡の調査	34
第1節	既往の調査	34
第2節	89-1区の調査	34
第8章	兎田遺跡の調査	36
第1節	既往の調査	36
第2節	89-1区の調査	37
第9章	仏性寺跡の調査	38
第1節	既往の調査	38
第2節	調査の成果	38
第10章	まとめ	41

挿 図 目 次

第1図	男里遺跡89-1区地形図	7
第2図	男里遺跡89-2区地形図	9
第3図	男里遺跡89-7・8・9・88-16区地形図	12
第4図	男里遺跡89-10・88-17区地形図	15
第5図	幡代遺跡調査区位置図	21
第6図	岡中遺跡調査区位置図	23
第7図	岡中遺跡89-1区遺構図および断面図	24
第8図	岡中遺跡89-2区出土の軒丸瓦	26
第9図	岡中遺跡89-2区出土の軒平瓦	27
第10図	岡中遺跡89-2区出土の鬼瓦	28
第11図	北野遺跡調査区位置図	30
第12図	岡田遺跡調査区位置図	32
第13図	海会寺跡調査区位置図	35
第14図	海会寺跡89-1区遺構図および断面図	35
第15図	兎田遺跡調査区位置図	37
第16図	仏性寺跡調査区位置図	39

表 目 次

第1表	発掘および試掘届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	45

図 版 目 次

- PL. 1 泉南地域の文化財
- PL. 2 泉南地域の地形分類
- PL. 3 男里遺跡調査区位置図
- PL. 4 男里遺跡調査区①
- PL. 5 男里遺跡調査区②・北野遺跡・幡代遺跡調査区
- PL. 6 岡中遺跡・岡田遺跡・兎田遺跡調査区
- PL. 7 仏性寺跡調査区北壁断面図
- PL. 8 各調査区出土の遺物
- PL. 9 岡中遺跡89-2区出土の平・丸瓦
- PL. 10 男里遺跡89-1区
- PL. 11 男里遺跡89-2・3区
- PL. 12 男里遺跡89-4・5区
- PL. 13 男里遺跡89-6・7区
- PL. 14 男里遺跡89-8・9区
- PL. 15 男里遺跡89-10区
- PL. 16 男里遺跡88-17区
- PL. 17 男里遺跡88-16・18区
- PL. 18 幡代遺跡89-1・2区
- PL. 19 岡中遺跡89-1・2区
- PL. 20 岡中遺跡88-3区・北野遺跡89-1区
- PL. 21 岡田遺跡89-1・2区
- PL. 22 海会寺跡89-1区・兎田遺跡89-1区
- PL. 23 仏性寺跡調査区①
- PL. 24 仏性寺跡調査区②
- PL. 25 男里遺跡・岡中遺跡出土の遺物
- PL. 26 岡中遺跡89-2区出土の軒瓦・丸瓦

PL. 27 岡中遺跡89-2区出土の平瓦①

PL. 28 岡中遺跡89-2区出土の平瓦②

PL. 29 仏性寺跡出土の土器

泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ

第1章 調査の経過

市域の西部、男里川下流の平地に、縄文晩期から近現代まで連綿と営まれつづける人間の生活活動の場がある。現代、我々が男里遺跡と呼ぶ場所である。ここは泉南市域の歴史を語る上で、非常に大きなウエイトを占める遺跡である。

さて、ここ男里遺跡では本年度、個人住宅建設等に伴う発掘調査を16件おこなった。これらの調査では、古代から中近世にいたるまで、遺構・遺物・包含層を確認し、これまでの成果に加え、さらに詳細な情報を収集することができた。

男里川を上流に遡ると幡代集落にいたる。ここには平安後期から中近世にいたる複合遺跡、幡代遺跡が所在する。当遺跡では今回、2件の発掘調査をおこなった。ここでは旧地形の復原が除々に行われつつあるため、その一助となるデータが得られた。

さらに川を遡ると、川が山間部に入る手前で大きく蛇行する。このため広い氾濫原が形成されているが、この一帯にひろがる遺跡が岡中遺跡である。ごく最近発見された遺跡で調査数も少ないが、平安後期に緒を発する寺院跡や14・5世紀の土坑墓群などが確認されている。市域の中世を語るには忘れてはならない遺跡である。当遺跡では本年度は4件の発掘調査を行い、遺跡の範囲を知る上で重要な包含層の広がり確認された。

ついで樫井川流域に眼を移そう。

北野遺跡では従来、段丘面への開発進出の時期が問題とされてきた。中世には確実に開発されているが、それがいつまで遡るかが焦点となっていた。本年度は1件の発掘調査が行われ、古代の遺物包含層を確認でき、この問題点にある意味での方向性をもたせることとなった。

岡田遺跡は分布調査で発見された遺跡である。中世を中心とし、近世に至るまで多くの遺物が採集されていたが、表面採集の遺物のみでは、その実態に迫

るには資料が少なすぎた。本年度の2件の調査が初めての発掘調査となり、ここから中世遺物包含層が確認されるなど、今後の調査結果に期待がもたれることとなった。

市域唯一の白鳳寺院・海会寺跡では1件の発掘調査を行った。これまで寺域外での調査は少なく、その詳細は把握できていなかった。しかし、今年度の調査では遺構を確認することができ、貴重な資料を得ることができた。

近年発見された遺跡として、兎田遺跡もあげることができよう。当遺跡も発見から日が浅く、その内容・性格は「中世遺物包含層が認められる」こと以外ほとんど知られていない。本年度は唯一1件の発掘調査が行われたが、今回は樫井川左岸の層構成をかいまみるにとどまった。

平安後期創建とされる仏性寺跡では、今回1件の調査が行われた。この調査では、遺跡を横断する形でトレンチを設定することができた。寺院関係遺構の検出はできなかったが、広範囲に広がる包含層の状態を確認でき、今後の内容解明の一助となることと思われる。

以上の各遺跡における調査区、位置、申請者、規模、用途、調査年月は第2表に示したとおりである。

第1表 発掘および試掘届出一覧表

平成2年2月28日現在

年 月	発 掘		試 掘		計	
	件 数	面 積 (㎡)	件 数	面 積 (㎡)	件 数	面 積 (㎡)
元. 4	1	285	5	4,092.515	6	4,377.515
5	6	1,603.95	5	5,000.874	11	6,604.824
6	3	803.49	5	8,622.73	8	9,426.22
7	9	1,898.292	4	23,948.625	13	25,846.917
8	6	4,351.327	7	27,925.233	13	32,276.56
9	6	741.029	4	4,700.55	10	5,441.57
10	6	1,540.87	2	2,822.24	8	4,363.11
11	9	3,196.2779	2	2,161.94	11	5,358.2179
12	5	1,715.82	2	1,439.56	7	3,155.38
2. 1	12	3,529.725	3	2,086.27	15	5,615.995
2	7	5,173.35	3	20,722.874	10	25,896.224
計	70	24,839.1219	42	103,523.411	112	128,362.5329

第 2 表 発掘調査一覧表

No	遺跡名	地区名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	89-1区	馬場		330.57	住宅新築	元年6月	本書掲載
2	男里遺跡	89-2区	馬場		285	倉庫	元年6月	同上
3	男里遺跡	89-3区	馬場		584	倉庫	2年1月	同上
4	男里遺跡	89-4区	幡代		325.72	住宅新築	元年6月	同上
5	男里遺跡	89-5区	樽井		89.30	店舗付住宅	元年12月	同上
6	男里遺跡	89-6区	男里		636.26	住宅新築	2年1月	同上
7	男里遺跡	89-7区	男里		203	賃貸アパート	元年9月	同上
8	男里遺跡	89-8区	男里		285	住宅新築	元年4月	同上
9	男里遺跡	89-9区	男里		339.27	住宅新築	元年8月	同上
10	男里遺跡	89-10区	男里		235.34	農薬用倉庫	元年7月	同上
11	男里遺跡	89-11区	男里		456	プール新築	元年9月	トレンチを5カ所設定。遺構・遺物包含層は検出できなかった。
12	男里遺跡	89-12区	男里		250	河川改修に伴う道路拡幅	元年6月	トレンチを2カ所設定したが、遺構・遺物は検出できなかった。
13	男里遺跡	89-13区	男里		172.61	住宅増築	2年1月	トレンチを1カ所設定したが、遺構・遺物は検出できなかった。
14	男里遺跡	89-14区	樽井		458.86	共同住宅	元年12月	トレンチを1カ所設定。遺構・遺物包含層は検出できなかった。
15	男里遺跡	89-15区	馬場		985	分譲住宅	元年10月	トレンチを2カ所設定したが、遺構・遺物は検出できなかった。
16	男里遺跡	89-16区	男里		250	水路改修	2年1～3月	別書報告
17	男里遺跡	88-16区	男里		411.98	住宅新築	元年2月	本書掲載
18	男里遺跡	88-17区	男里		20	フェンス改修	元年3月	同上
19	男里遺跡	88-18区	男里		483	道路拡幅	元年3月	同上
20	幡代遺跡	89-1区	幡代		823.16	住宅新築	元年11月	同上
21	幡代遺跡	89-2区	信達岡中		229.04	住宅新築	元年10月	同上
22	岡中遺跡	89-1区	信達岡中		206.50	住宅新築	元年4月	同上
23	岡中遺跡	89-2区	信達岡中		192.77	住宅新築	元年7月	同上
24	岡中遺跡	89-3区	信達岡中		580.52	住宅新築	2年2月	現在整理中
25	岡中遺跡	89-4区	信達岡中		523.26	住宅新築	2年2月	同上
26	岡中遺跡	88-3区	信達岡中		584.531	住宅新築	元年3月	本書掲載
27	北野遺跡	89-1区	信達大苗代		669.34	住宅新築	元年5月	同上
28	岡田遺跡	89-1区	中小路		340.432	住宅新築	元年7月	同上
29	岡田遺跡	89-2区	岡田		362.10	住宅新築	元年12月	同上
30	海会寺跡	89-1区	信達大苗代		72.617	住宅新築	元年8月	同上
31	海会寺跡	89-2区	信達大苗代		830	共同住宅	元年7～11月	別書報告
32	新家オドリ山南遺跡	89年度	新家		5.237	パチンコ店建設	元年10月	トレンチを1カ所設定。遺構・遺物包含層は検出できなかった。
33	兔田遺跡	89-1区	兔田		584.75	分譲住宅	元年6月	本書掲載
34	仏性寺跡	88年度	信達市場		139.77	道路拡幅	元年1～3月	同上

第3表 試掘調査一覧表

No	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	範囲外	樽井		512.51	共同住宅	元年4月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構および遺物包含層は確認されなかった。
2	範囲外	信達牧野		1,547	学校プール	元年4月18日	トレンチ5カ所設定したが、遺構および遺物包含層は確認されなかった。
3	範囲外	馬場		972.345	倉庫	元年4月24日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
4	範囲外	信達牧野		1,470.89	倉庫	元年5月19日	トレンチ3カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
5	範囲外	新家		953.04	ショッピング プラザ	元年5月31日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
6	範囲外	中小路		349.39	店舗	元年6月6日	工事中に立会を行う。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
7	範囲外	信達市場		505.35	事務所付き 住宅	元年6月6日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
8	範囲外	信達市場		784.334	共同住宅	元年6月19日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
9	範囲外	信達牧野		469.15	共同住宅	元年6月22日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
10	範囲外	信達牧野		5,440	幼稚園	元年7月4日	トレンチ5カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
11	範囲外	信達市場		2,271	資材置場	元年7月19日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
12	範囲外	信達市場		1,787	共同住宅	元年7月25日	トレンチ2カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
13	範囲外	樽井		5,415.85	店舗倉庫	元年8月1日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
14	範囲外	信達牧野		3,300	分譲住宅予定	元年8月29日	トレンチ2カ所設定したが、遺構および遺物包含層は確認されなかった。
15	範囲外	信達牧野		990.96	木工所建設	元年9月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構および遺物包含層は確認されなかった。
16	範囲外	樽井		801.65	共同住宅	元年9月11日	工事中に立会を行う。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
17	範囲外	信達市場		1,294.17	分譲住宅予定	元年9月12日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
18	範囲外	樽井		421.23	公衆浴場	元年9月13日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
19	範囲外	岡田		958.74	事務所	元年9月14日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
20	範囲外	岡田		981.81	社屋ビル	元年9月18日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
21	範囲外	信達市場		2,116	分譲住宅予定	元年9月25日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
22	範囲外	信達市場 牧野		8,237.293	礼拝場	元年10月3日	トレンチ2カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
23	範囲外	樽井		644	分譲住宅	元年10月16日	トレンチ5カ所設定。土器微細片が極少量存在するが、遺物包含層とは認定出来ない。

No	遺跡名	位置	申請者	面積(㎡)	用途	調査年月日	備考
24	範囲外	樽井 1150 1152-1		910.43	分譲住宅	元年10月28日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
25	範囲外	信達市場 808-3		1,652.72	共同住宅	元年10月28日	トレンチ2カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
26	範囲外	信達市場 247-1 249-1		958.94	共同住宅	元年11月6日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
27	範囲外	信達市場 1902		1,203	分譲住宅予定	元年11月27日	トレンチ5カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。
28	範囲外	岡田 173-2 他		10,000	道路新設	元年12月～ 2年3月末	総延長700mのトレンチを設定。遺構および遺物を確認した。新規発見遺跡。
29	範囲外	信達市場 1609-1		380.93	無線電話 送信局舎	2年2月5日	トレンチ1カ所設定。遺構、遺物、遺物包含層は確認できなかった。

第4表 立会調査一覧表

No	遺跡名	位置	申請者	面積(㎡)	用途	調査年月日	備考
1	フキアゲ山西遺跡	新家		199.79	住宅新築	元年4月15日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
2	新家オドリ山東遺跡	新家		165.86	住宅新築	元年6月15日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
3	フキアゲ山西遺跡	新家		1.75	ガス管理設	元年6月27日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
4	新家オドリ山遺跡	新家		102.62	住宅新築	元年8月28日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
5	新家オドリ山遺跡	新家		100.65	住宅新築	元年8月28日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
6	新家オドリ山遺跡	新家		100.95	住宅新築	元年8月28日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
7	新家オドリ山遺跡	新家		101.40	住宅新築	元年8月28日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
8	新家オドリ山遺跡	新家		104.16	住宅新築	元年8月28日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
9	フキアゲ山東遺跡	兎田		185.28	住宅新築	元年9月10日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
10	海会寺跡	信達大苗代		105.43	住宅新築	元年9月11日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
11	幡代遺跡	幡代		7.70	ガス管理設	元年10月3日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
12	天神ノ森遺跡	男里		151.78	住宅新築	元年10月3日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
13	新家オドリ山東遺跡	新家		620.43	住宅新築	元年11月4日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
14	丘之池	信達市場		120	ため池改修	元年11月7日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
15	新家古墳群	新家		1.5	埋管撤去	元年11月11日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
16	新家古墳群	新家		1.0	ガス管理設	元年11月21日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
17	新家オドリ山南遺跡	新家		24.64	看板設置	元年11月30日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
18	新家オドリ山遺跡	新家		96.25	住宅新築	元年12月1日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
19	新家オドリ山遺跡	新家		66.18	住宅新築	元年12月1日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
20	新家オドリ山遺跡	新家		863.9579	下水管理設	元年12月1日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
21	新家オドリ山遺跡	新家		54	ガス管理設	元年12月15日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
22	兎田遺跡	兎田		45	排水管理設	2年1月9日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
23	芦谷池	信達市場		50	余水吐工事	2年1月17日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
24	永寿下池	信達牧野		200	ため池改修	2年1月25日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
25	高田山古墳群	幡代		214.22	住宅新築	2年2月1日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。
26	海会寺跡	信達大苗代		1.3	ガス管理設	2年2月3日	遺物、遺物包含層は確認できなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査(PL.3)

男里遺跡ではこれまで半世紀以上にわたって断続的に数多くの調査が行われてきた。これらにより、縄文時代晩期から近現代にいたるまで、連綿と営まれる人々の活動を追求することが可能となっている。

縄文時代では、遺跡の北東縁付近に滋賀里Ⅲ～Ⅳ型式の時期にあたる溝が確認されている。現在のところ縄文時代遺構が確認されているのは当地付近のみである。

弥生時代では遺跡の中央に位置する双子池南方に集落が展開していることが判明している。また、これに接して木棺墓から構成される墓域も確認されている。これらはみな良好に保存されており、今後も集落の範囲確認などが期待できる。

やや時代が降った古墳時代でも、集落の展開する部分はさほど変わらない。しかし、その範囲は確実に広がりを見せ、現在の男里集落部分でも包含層が確認されるに至っている。

古代の遺構分布は、現在までに確認されているところでは双子池周辺に限られている。しかし、古墳時代包含層の確認範囲が拡大していることから、今後も拡大していくことであろう。

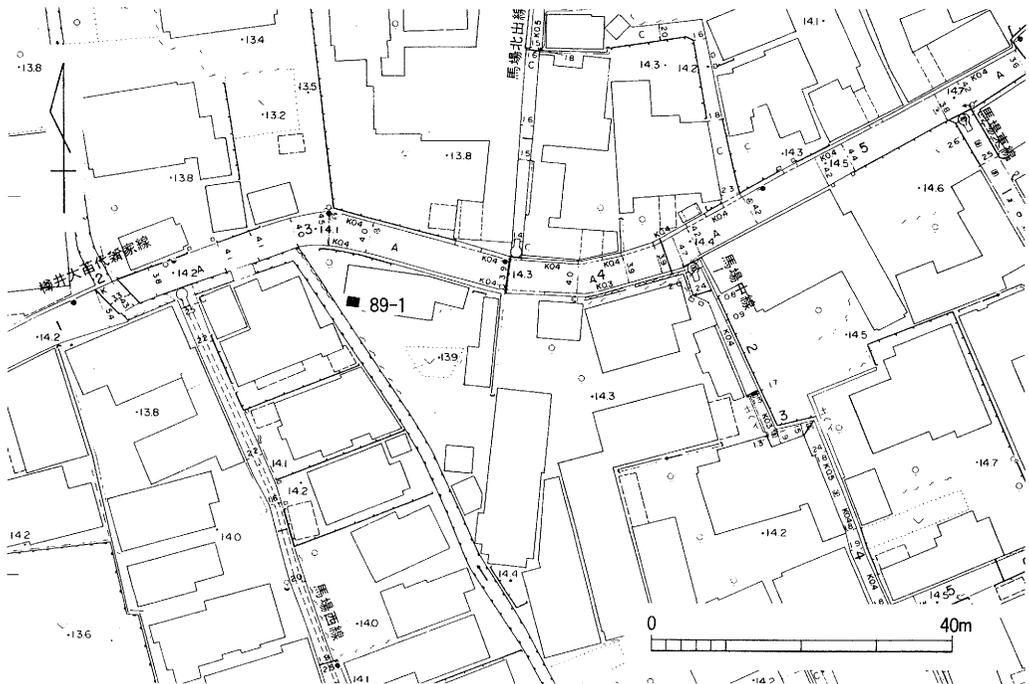
近年の調査では中世の遺構確認が際だっている。特に現在の男里集落部分で、寺院関係遺構が多く確認されている。また、近世では消滅してしまった男里川の旧堤体が確認されている。

このように縄文時代から近世に至るまで男里遺跡では数多くの情報が集積されている。毎年繰り返すようだが、いよいよこの豊かな情報の集積から、歴史を再構成していく段階に来ているのではなかろうか。念を押してから、今年度の調査成果を報告していきたい。

第2節 89-1区の調査

1. 位置（PL.3、第1図）

第1区は遺跡の東北縁にあたる、現在の馬場集落の北西端に位置している。地形分類上は、沖積低地にあたる地点である。



第1図 男里遺跡89-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL.4）

表土層を取り除けば近世遺物包含層の黄灰色土が露出する。この下層には一部に淡黄灰色土が介在し、中世包含層の暗黄灰色土が存在する。今回遺構が検出されたのは礫混じり淡黄灰色粘土の上面である。地表からの深さでは、男里遺跡の遺構面としてはかなり浅い部類に入ろうか。

遺物は、黄灰色土から近世、暗黄灰色土から中世遺物が出土した。

3. 遺構（PL.4・10）

当調査区で検出された遺構はピット・土坑などであるが、比較的密集してい

る様子がうかがえた。

ピットはおおむね直径20～30cmを測るものである。調査区内ではその配置に規則性をみいだすことはできなかった。柱穴は、ピット1・2・5・6で確認できた。なお、ピット1・5の柱穴からは瓦器・碗片が出土している。埋土はピット1・5が黄色混じり黒褐色土、2・4・6が黒褐色土、3が淡灰色土と、大きく3種類に分けられる。

土坑は全容を知り得るものがなく、その性格はまったく不明である。ただしSK04については底部こそ火を受けていないものの、スサ入り粘土塊を含む多量の焼土で埋まっており、その性格の一部をかいまみることができよう。埋土はSK02・03が暗黄灰土、SK04は橙色粘土混じり焼土層である。

以上の各遺構からはわずかだが遺物が出土している。その大半が中世の範疇でとらえられるが、唯一SK02のみ近世の陶器片が出土している。

4. 遺物 (PL.8・25)

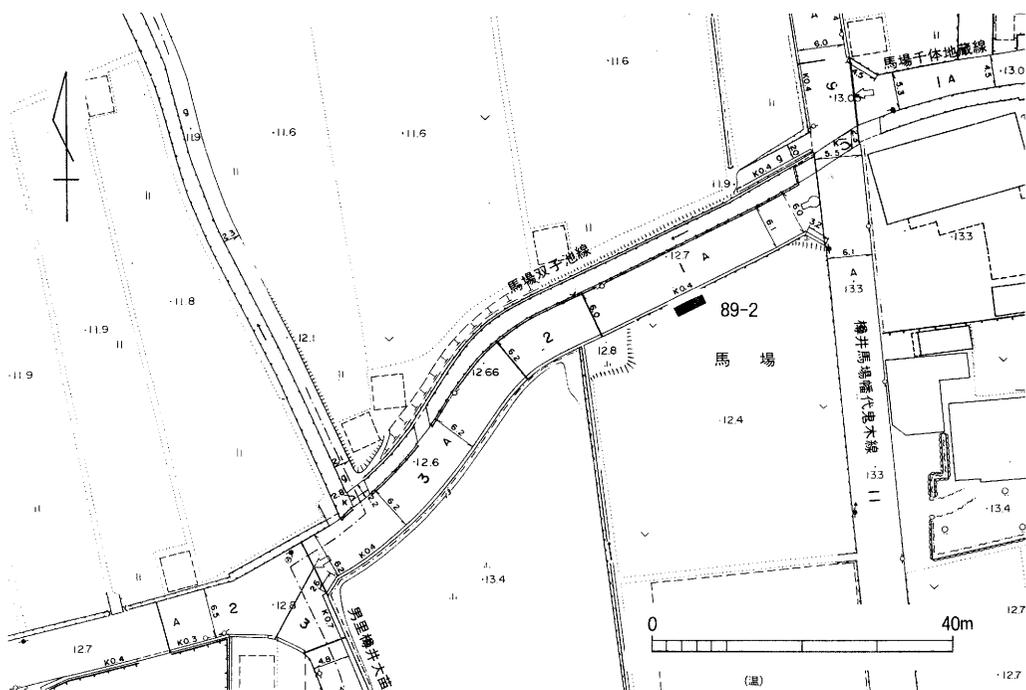
遺物は瓦器、土師器、陶器、磁器、瓦片、粘土塊などが出土している。しかし、遺構・包含層共に良好な状態で出土した遺物はなく、ほとんどが図化不能なものばかりである。

図化できたのはピット5より出土した瓦器(1)、SK02より出土した陶磁器(2・3)のみである。瓦器は口縁端部内面に1条の沈線がめぐる。調整については、摩滅が激しく不明。

第3節 89-2区の調査

1. 位置 (PL.3、第2図)

遺跡の中央東よりにあたる地点で、付近からは古代の建物となる可能性のある堀形痕や、中世の溝などが検出されており、遺跡内でも遺構密度の高い部分である。今回の調査でも、予想に違わず中世遺構が確認された。



第2図 男里遺跡 89-2 区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL.4)

耕土・床土の下層には、旧耕土・旧床土が見られる。比較的薄いこれらの層を取り除くと、暗黒褐色土が続いて露出する。この上面は上層遺構面としてとらえられる。この下層はすぐに黄褐色粘土の地山となる。遺物はほとんど出土せず、良好な遺物包含層として捉えることのできる層は存在しない。遺構面は前述の通り、2面確認されている。

3. 遺構 (PL.4・11)

遺構は比較的高い密度で検出されている。上層遺構面からはピット・溝が、下層面からはピット・土坑・溝などが確認された。

上層遺構面の溝 (SD02) は、幅最大 2.6 m、深さ 0.3 m を測るが、平面形はさだかでないため、不定形土坑となる可能性もあろう。埋土は暗灰褐色土。ピット 1 は柱穴を伴うもので、直径 30 cm、深さ 40 cm をはかる。埋土は堀形黒褐色

土、柱穴は暗黒褐色土である。なお、定かではないが、このほかのピットも上層遺構面からほりこまれている可能性がある。

下層では土坑・溝などが検出された。

土坑（SK01～03）の平面形は長円～円形で、規模も直径50cm～1m以上とふぞろいなものである。深さはみな非常に浅く、数cm程しかない。埋土はすべて礫混じり黄褐色土である。性格についてはまったく不明。

溝（SD01）は幅1.6m、深さ10mをはかり、その底部はほぼ磁北方向に向かって緩やかに傾斜している。埋土は、礫混じり暗黄灰色土である。

第4節 89-3区の調査（PL.3・4・11）

調査区は遺跡の中央東より、地形分類上は沖積段丘面の縁辺に位置する。こより南方では遺跡内でも弥生時代包含層が良好に残っている。今回の調査では遺構・遺物・遺物包含層は確認できなかったが、沖積段丘面が西へ向かって傾斜していく斜面が確認された。ある程度削平されている可能性は充分考えられるが、旧地形の復原をおこなううえで貴重なデータとなろう。

第5節 89-4区の調査

1. 位置（PL.3）

遺跡の南端付近に位置し、すぐ南側からは幡代遺跡が広がり始める地点である。現在の国道26号線・幡代交差点から北へ50mのところである。地形分類上は沖積段丘面にあたる。

2. 層位と遺物の出土状況（PL.4・12）

盛土を除けば、耕土・床土がそのまま残されており、この下層から中世遺物包含層である暗灰色土が確認された。このあと下方に炭片が混じる暗黄灰色土、地山である淡黄褐色粘土と続いていく。地山は層厚100cm以上を測る。なお、遺構は確認できなかった。

遺物は、暗灰色土から中世土師器片が出土しているが、みな細片で図化できなかった。

第6節 89-5区の調査(PL.3・4・12)

5区は遺跡の北縁に位置し、現在の府道堺阪南線に面している。調査対象面積が狭く、小規模なトレンチを設定したにとどまった。厚さ1.3mにおよぶ多量の盛土を取り除くと耕土層が確認できた。その下層には灰色混じり褐色土、そして円礫混じりの灰黄色土が広がり、遺物包含層はその存在を確認できなかった。遺物、遺構はまったく確認できなかった。

第7節 89-6区の調査

1. 位置(PL.3)

遺跡の北端付近に位置し、唯一縄文時代遺構を検出した地点から約100m南側にあたる。地形分類上は、沖積低地上に立地している。

2. 層位と遺物の出土状況(PL.4・13)

盛土を除くと上より、耕土・床土、旧耕土・旧床土、黄褐色砂質土、黄灰色粘質砂、黄灰色粘土、淡灰色褐色土、暗青灰色粘土と続いていく。このうち黄灰色粘土上面は比較的安定しており、中世遺構の存在が想定されたが、何等検出することはできなかった。これより下方は湧水のため確認できなかったが、わずかに砂礫層の存在を知ることができた。青灰色系粘土・砂礫層の存在などから、旧「男里川」の河道上である可能性があるだろう。

なお、遺物は淡灰褐色粘土層から古代須恵器片、黄褐色砂質土などから中世土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦片などが出土しておりそれぞれを古代・中世の遺物包含層としてとらえられる。

遺物は皆細片ばかりで図化に耐えるものはなかった。

第8節 89-7区の調査

1. 位置 (PL. 3、第3図)

遺跡の中央やや北よりに位置し、現在の男里集落のほぼ中央付近にあたる。地形分類上は、男里川によって形成された自然堤防上に立地している。



第3図 男里遺跡 89-7・8・9・88-16区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4)

盛土を除き、上から黄灰色粘土、暗灰色土、暗茶灰色土、暗灰褐色土、地山である暗灰色褐色混じり暗黄色粘土にいたる。この下層は灰色砂を含むこぶし大の円礫層、砂礫層と続いていく。

遺物は暗灰褐色土から、中世土師器がわずかに出土したのみである。

3. 遺構 (PL. 4・13)

遺構はほぼ正方形の堀形状遺構が検出された。柱穴は確認できず、遺物はま

まったく伴わなかった。規模は一辺が45cm、深さ8cm、埋土は暗灰色混じり黄橙色土である。

4. 遺物（PL.8）

遺物は包含層からわずかに中世土師器が出土したのみである。本書に掲載した1点を除き、そのほとんどが図化不能な細片であった。土師器・皿(4)は細片であるうえ、摩滅が著しい。胎土は精良で白色を呈す。

第9節 89-8区の調査

1. 位置（PL.3、第3図）

遺跡の中央やや北よりに位置しており、89-7区に隣接する地点での調査である。地形分類上は、男里川右岸に発達した自然堤防上に立地している。

2. 層位と遺物の出土状況（PL.4）

盛土の下層には、基本的に黄褐色混じり灰色土、黄色粘土混じり灰褐色砂質土、灰褐色含礫土、そして地山である淡黄色砂質土と続いていく。

遺構は地山上面で検出された。遺物の分布密度は低く、さほど出土していない。地山直上層からは、紀伊系甕の口縁と思われる土師器細片が出土している。

3. 遺構（PL.4・14）

ピット、土坑、溝が確認されている。

ピットは3カ所検出された。ピット1は柱穴を持つ。また、ピット3では数個の自然石が見られた。これはピットの底にしかれているのではなく、肩付近に挿入されているような状況だった。ピットは直線的に並んでいるが、建物あるいは柵列などに伴うものかは確認できなかった。規模はピット1が直径20cm、深さ10cm、ピット2は径30cm、深さ5cm、ピット3が径30cm、深さ10cmをそれぞれ測る。

土坑（SK01）はトレンチのほぼ中央で検出された。その性格については不明

である。直径70 cm、深さ5 cmを測る。

溝(SD01)は、ほぼ直線的に東西にはしる。底部は東へ向かって緩やかに傾斜しており、東流していたものと思われる。トレンチの拡張が不可能だったため、その全形は知り得なかった。幅20 cm以上、深さ10 cm以上を測る。

4. 遺物(PL.8)

遺物は包含層・遺構共に比較的まとまって出土したが、保存状態が悪く摩滅が著しい。図化に耐えることができたのは、ごくわずかだった。遺構からは、ピット1・瓦器、ピット2・白土器、ピット3・土師器・瓦器、SK01・土師器・瓦器がそれぞれ出土している。

5・6は瓦器・椀である。どちらも摩滅が激しく、調整などはほとんど観察不可能に近い。5はごくわずかに暗文の痕跡をみてとることができた。

7・8はともに土師質の蛸壺である。胎土には砂粒を多く含み、軟質で淡橙灰色を呈している。なお、当調査区では、細片ながらも蛸壺は比較的多く認められた。みな全長30 cmほどの砲弾形のものと考えられる。

第10節 89 - 9 区の調査

1. 位置(PL.3、第3図)

調査区は遺跡の中央やや北西よりに位置している。従来周辺の自然堤防上では、中世以降の遺構包含層が高い頻度で検出されることが多かった。だが最近の調査によると、さほど距離を隔てない自然堤防上でも、古墳時代遺物がまとまって出土することが知られるようになっている。

2. 層位と遺物の出土状況(PL.4・14)

層位は上から順に、耕作土、淡黄灰色土、暗灰色礫層、淡灰色砂質土が見られる。この下層からは遺物包含層で、淡褐色混じり灰色土、暗褐色含礫土と続き、暗灰褐色礫層の地山となる。遺物は地山直上層である暗褐色含礫土から多く出土している。細片ばかりのため詳細は不明だが、奈良時代まで降るである

う須恵器・土師器が中心となる。

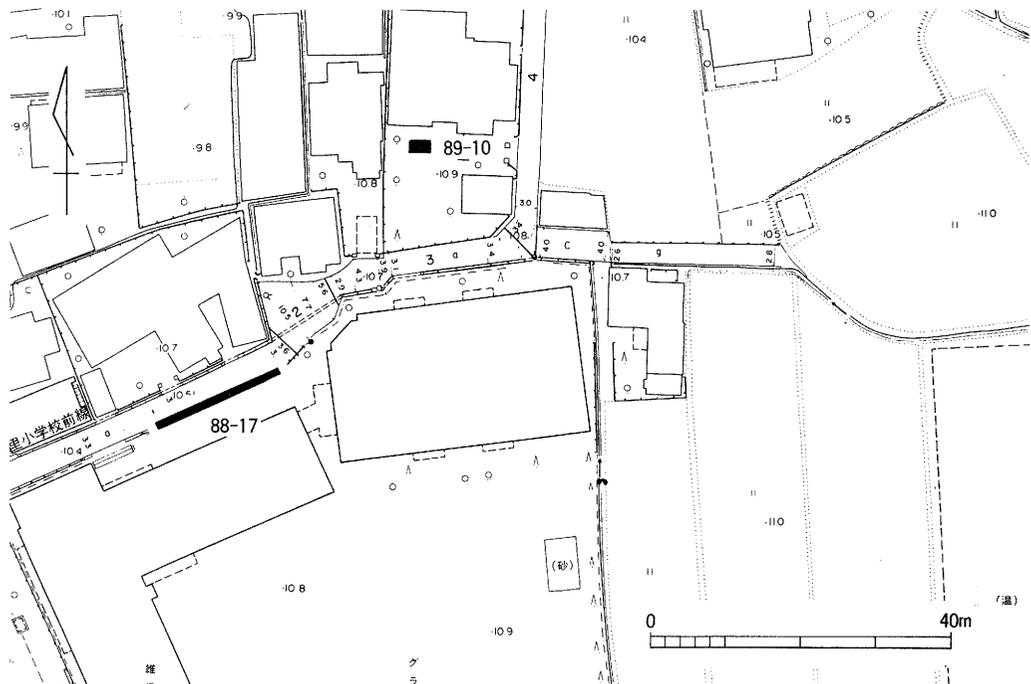
3. 遺物

遺物は古代遺物包含層である暗褐色含礫土から出土したものに限られる。奈良時代の須恵器・土師器が中心となるが、みな細片ばかりで図化に耐えるものは無かった。なお、わずかに数点ではあるが、弥生土器の可能性のある軟質土器片、古墳時代の土師器片、9世紀代以降の土師器片、製塩土器様の軟質土器片が含まれている。

第11節 89 - 10 区の調査

1. 位置 (PL. 3、第4図)

遺跡の西部中央付近、現在の雄信小学校の北側に隣接する地点での調査である。地形分類上は、沖積低地上に立地している。過去の同校地の調査では、弥生・古墳時代遺物が出土することでよく知られている。



第4図 男里遺跡 89-10・88-17区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（PL・5）

盛土を除けば、上から耕土・床土、旧耕土・旧床土、遺物包含層である褐色混じり淡灰色砂質土、遺構面を構成するマンガン斑混じり黄灰色粘土と続いていく。

これにより下層からは遺物の出土は認められず砂礫層が堆積している。

遺物の出土絶対量は少ないが、淡灰色砂質土からは中世、遺構面構成層からは古代の遺物がそれぞれ出土した。遺構からの遺物出土は認められなかった。

3. 遺構（PL・5・15）

ピットが1カ所、土坑は2カ所、溝3条とともに、溝に平行して帯状に伸びる畦状の高まりが検出された。

ピットはトレンチの東端で検出された。全形がわからないため、土坑あるいは溝になる可能性もあるかもしれない。規模は径20cm以上、深さ6cmを測る。

土坑はトレンチ中央付近で検出された。SK01はSK02によって切られると言う関係にある。規模はSK01が長軸方向に70cm以上、深さ10cm以上、SK02が長軸40cm以上、深さ10cm以上をそれぞれ測るものである。

溝は3条検出された。すべてはほぼ南北に平行に走り、底部はごくわずかに北に向かって傾斜している。規模は幅が、SD01は40cm、SD02・SD03共に10cmをはかる。深さは皆非常に浅く、数cm程度である。

これらの溝に平行するように、畦状の高まりが2条確認された。その性格は不明だが、現状での高さは非常に低く、遺構面の起伏の可能性も否定できない。また、調査区外にもこれらと対応する畦が存在し、幅広で浅い溝を形成しているものかも知れない。この点については、調査区が狭いため確認できなかった。検出された「畦状遺構」の規模は、2条とも幅40cm、高さ5cmをはかる。

遺構埋土についてはSK02が淡灰色粗砂、それ以外のものはすべて褐色混じり淡灰色砂質土である。

これらの遺構に伴う遺物はまったく出土しなかった。

4. 遺物

遺物は褐色混じり淡灰色砂質土から十数点出土した。しかし辛うじて土師器と認定できる程度で、器形がわかるものは無かった。

遺構面を形成するマンガ斑混じり黄灰色粘土から、須恵器・杯細片および土師器片が出土している。これらは奈良時代の所産となるものとして差し支え無いだろう。しかし、これも図化は不可能だった。

第12節 88-16区の調査

1. 位置(PL.3、第3図)

遺跡の中央やや北よりに位置しており、89-6・7区に隣接する地点での調査である。地形分類上は、男里川右岸に発達した自然堤防上に立地している。

2. 層位と遺物の出土状況(PL.5)

盛土をのぞいた基本層序は5層からなる。上から、黄灰色系土層が3層見られ、その下層に淡黄灰色粘質シルト、砂礫層と続く。大きく分けるなら、3層ととらえられる。

遺構については、断面での確認となったが、黄灰色系土層上面と、砂礫層上面の上下2面存在する。ただし、下層のものは自然地形の可能性はある。

遺物は上層遺構埋土から若干出土するのみだった。

3. 遺構(PL.17)

上層のものは長大な土坑か溝と考えられる。残念ながら平面形は確認できなかった。埋土は礫混じりの灰褐色系土及び、黒褐色土からなる。規模は幅2.2m、深さ約60cmを測る。

下層で確認されたものは、同様に溝もしくは土坑、または自然地形と考えられる。自然の谷、あるいは流路と捉えるほうがよいかも知れない。規模は幅2m、深さ80cmを測る。

4. 遺物

遺物は、わずかに上層遺構から出土した土師器の細片が少量見られるにすぎない。余りに状態がわるく、器形の判別さえも不可能だった。

第13節 88 - 17 区の調査

1. 位置 (PL. 3、第4図)

現在の雄信小学校の校門付近にあたる。地形分類上は沖積低地とされる部分である。過去に行われたこの小学校地の調査では、多量の弥生土器が出土しており、男里弥生集落の南西限にあたるものと考えられている。89-10区とは指呼の間にあり、直線距離で約20m程しか離れていない。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・16)

基本的な層序は盛土を除くと、上から、耕土・床土、黄灰色系土層、褐色混じり灰色系土層、そして地山にあたる褐色混じり黄色粘土の大きく4類に分けることができる。遺物は黄灰色系土層には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器が混在し、また、褐色混じり灰色系土層からは、弥生土器、須恵器、土師器が出土する。その他の層からはほとんど出土はみとめられなかった。なお、遺構はまったく確認できなかった。

3. 遺物 (PL. 8・25)

須恵器は杯蓋(9)、杯底部片(10~12)、壺肩部(13)などが出土した。みな細片で摩滅が激しく保存状態は悪い。9・11が胎土が緻密で軟質だが、そのほかのものは硬質で胎土も若干粗い。

14は土師質の把手である。内面には、接合時に斜め下方から押さえつけた指頭痕が深さ2cm程の穴となって残っている。胎土はやや粗く、砂粒を多く含んでいる。

15はかまどの基底部片である。土師質で粗い胎土には、砂粒を多く含む。比較的荒い造りで、粘土接合痕が明瞭に残っている。

16は須恵器・椀である。いわゆる東播磨系のものであろう。口縁端部はやや肥厚し、その上端に平坦な面を持つ。外面には重ね焼きの痕跡が認められる。胎土はやや粗いが砂粒は含まれない。焼成は良好で硬質の製品。

17は黒色土器B類・椀底部である。欠損しているが、高台の痕跡が明瞭に残っている。内外面ともに摩滅のため調整はまったくわからない。精良な胎土の製品。

18は瓦器・椀底部である。摩滅が著しく内外面ともに、瓦器特有の黒灰色部分はみられない。ただ、粘土紐を張り付けて高台としたことが辛うじてわかる。

19は土師器・皿である。胎土は精良で硬質の製品。口径7.5 cmを測る。

第14節 88-18区の調査(PL.3・5・17)

遺跡の中央東より付近の、「カスミ堤」と呼ばれる男里川の二重堤防跡地での調査である。同年度に周辺で行った数回の調査では、堤体あるいはその基底部が確認されたが、当地では完全に削平を受けたのか、その痕跡はまったく確認できなかった。

第3章 幡代遺跡の調査

第1節 既往の調査（第5図）

幡代遺跡における発掘調査の絶対数はあまり多くない。昭和59年に大阪府教育委員会が行った発掘調査が最も成果のあがった調査である。

遺跡の西側を南北に走る市道部分でおこなわれたこの調査では、平安時代後期から室町時代の遺物包含層とともに、同時期の所産と考えられる柱列が検出されている。このほか弥生時代に属すると思われる製塩土器が出土していることから、弥生時代には既にこの地に生活を営む人々が存在していた可能性も考えられる。

また、地元の研究者・向井俊生氏らにより、集落の北端付近で同時期の軒瓦や丸・平瓦片が採集されている。これらより平安時代後期に建立された寺院と、その周辺に展開する集落の存在が推定されるに至っている。

上記のように、これまでは遺跡の西縁付近での遺構検出にとどまっていたと言える。しかし、市教育委員会が87年度におこなった調査において、遺跡の西半中央付近、集落を南北に二分する道路沿いにおいて遺構を確認することができた。小トレンチのため遺構全形は確認できなかったが、溝状の落込みが確認された。この遺構の時期は決定し難いが、近世遺物包含層の下層にあたり、あくまで推測の域をでないが、中世にまで遡り得るものかも知れない。この層には東播磨系須恵器・こね鉢、瓦質土器・すり鉢等も包含されており、遺構には伴わないものの室町時代にもある程度遺物量のピークが認められるようである。

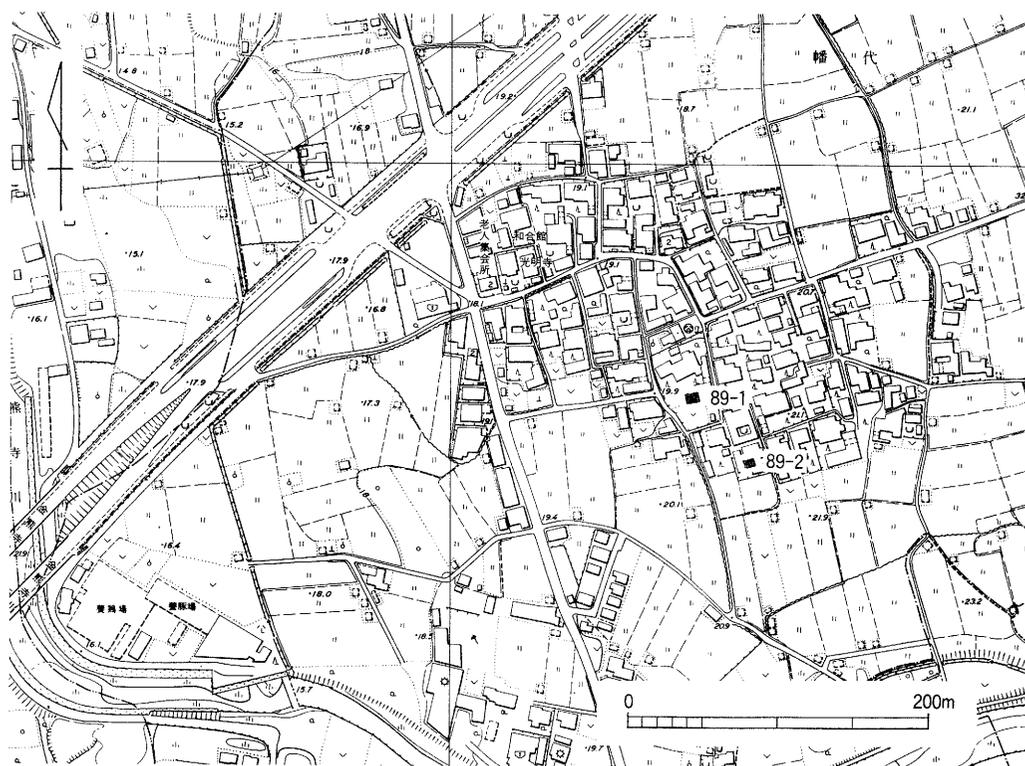
このように、これまでの調査結果を総合すると、幡代遺跡においては平安時代後期・室町時代そして近世という、大区分で3時期の盛期が認められる。また、今後の資料の増加によっては、弥生時代にも同様の盛期が求められるかもしれない。

なお、蛇足ながら、集落の東側で南北走する水系が断片的ながら確認されている。これは金熊寺川の旧河道と考えられており、これにより形成された沖積段丘面上に当遺跡は立地している。今後、この段丘面上に人々が活動の場を求

めた時代、あるいは当地周辺の古環境・微地形の復原などを追求していく必要がある。また遺跡の東半には広大な田畑が広がるが、この部分では北で約20°西偏する地割りが確認できる。条理地割りの痕跡の可能性が高く、今後の調査に期待したい。

第2節 89-1区の調査(PL.5・18、第5図)

1区は現在の幡代集落の中心やや南よりに位置し、地形分類上は沖積段丘面に立地している。この付近の最近の発掘調査では、遺構が比較的集中して確認されている。



第5図 幡代遺跡調査区位置図

層位は盛土をのぞいて上から順に、耕土・床土層、黄灰色系土層、灰褐色系粘土層、暗黄灰色系粘土層、地山の暗灰色粘土層と続いている。明確な遺構と

確認はできなかったが、最下層の暗黄灰色系粘土層上面が遺構面とすれば、黒褐色粘土・暗青灰色シルトは遺構埋土の可能性がある。

遺物はほとんど出土せず、最上層付近から近世瓦片等がわずかに出土した程度である。

遺構については先述の通り、最下層付近になんらかの落込みの存在があげられる。ただし、遺物は伴わないため断定できない。

第3節 89-2区の調査(PL.5・18、第5図)

2区は1区とさほどはなれておらず、直線距離で50m程の距離である。やはり遺跡内でも遺構の集中部分にあたる。

層序は、盛土の下層には耕土・床土層が良好に残っており、以下灰色混じり褐色土、黄褐色含礫土の地山へと続いていく。

遺物はほとんど出土せず、遺構はまったく確認できなかった。

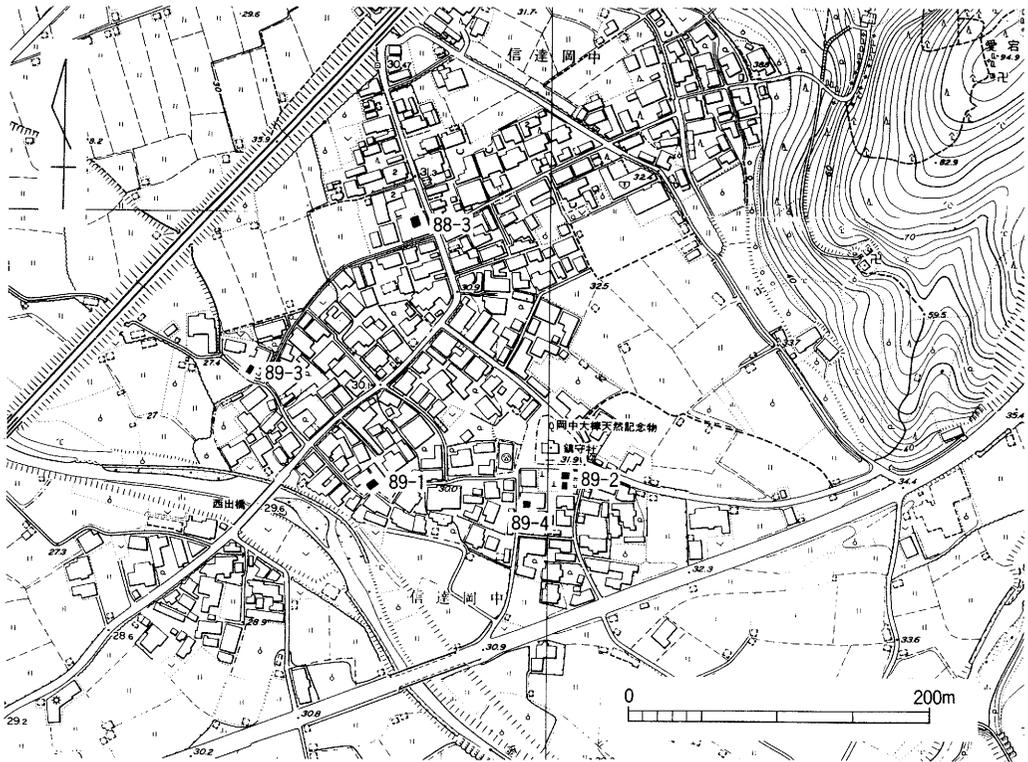
第4章 岡中遺跡の調査

第1節 既往の調査（第6図）

岡中遺跡は発見から日が浅いにもかかわらず、中世の市域を知る上で欠くことのできない情報を提供してくれる遺跡である。

遺跡の位置は、北流する金熊寺川が山地から平地に流れ込む付近で大きく蛇行する。この蛇行部分の右岸、広大な氾濫原上に立地する。現在の岡中集落を含む一帯である。なお、この左岸には同じく発見後間もない岡中西遺跡があり、両者間の有機的関連を追求することにより、市域の中世像がなお一層具体的になるものだろう。

これまでの発掘調査により、古代遺物包含層、平安後期に初源を求められる寺院跡、14～15世紀に形成された土坑墓群、これと同時期の鍛冶関係遺構など



第6図 岡中遺跡調査区位置図

の存在が確認されている。その他、集落遺構については、ほとんど確認されておらず今後の調査成果が期待される。

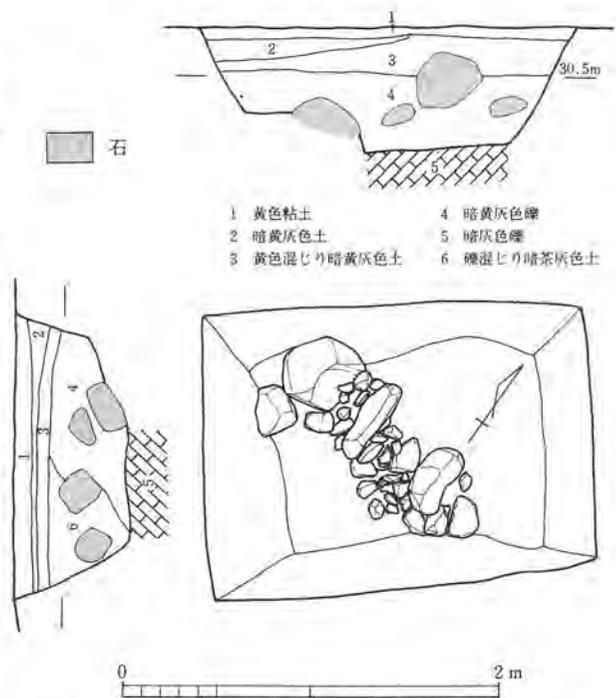
第2節 89-1区の調査

1. 位置（第6図）

位置は遺跡の西縁、金熊寺川右岸の自然堤防上に立地する。この近辺ではこれまでに発掘調査がおこなわれていず、包含層の広がりや把握するために格好の調査となった。

2. 層位と遺物の出土状況（第7図）

層位は基本的に、盛土、暗黄灰色礫に分けられる。遺物は暗黄灰色土から出土するが、近世でもかなり新しい時期のものが見受けられる。よって、同層は現在の建物構築時の盛土層と捉えるべきだろう。このように考えた場合、自然堆積による遺物包含層は存在しないといえよう。



第7図 岡中遺跡89-1区遺構図および断面図

3. 遺構（PL.19、第7図）

暗黄灰色土の下層から砂岩円礫を並べた石列が確認された。主軸はほぼ東西に向けられているが、構築は非常に雑でしっかりとしたものではない。その性格はまったく不明であるが、現在の建物の一世代前の建物に伴う遺構の可能性はあるだろうか。

第3節 89-2区の調査

1. 位置（第6図）

遺跡のほぼ中心にあたり、地形分類上は氾濫原に立地する。付近からは中世土坑墓群、寺院遺構などが発見されている。大阪府指定天然記念物の岡中鎮守社の大樟・マキの隣接地での調査である。

2. 層位と遺物の出土状況（PL.6）

現表上である盛土を除くと、部分的に焼土が混じる黄灰色系砂礫層、黄褐色砂層、暗灰色礫層が認められる。遺物が出土するのはここまで、これ以下は暗灰色および暗黄灰色の礫層・砂層が続いていく。

遺物が多く見られるのは、上層が黄灰色系砂礫層、下層が暗灰色礫層がある。上層のものは近世の非常に新しい瓦片ばかりであるが、下層からは中世の瓦片が中心となる。ただし、下層からも近世の所産と思われる瓦が出土するため、瓦堆積層の形成自体は近世のある一時期になるものと思われる。

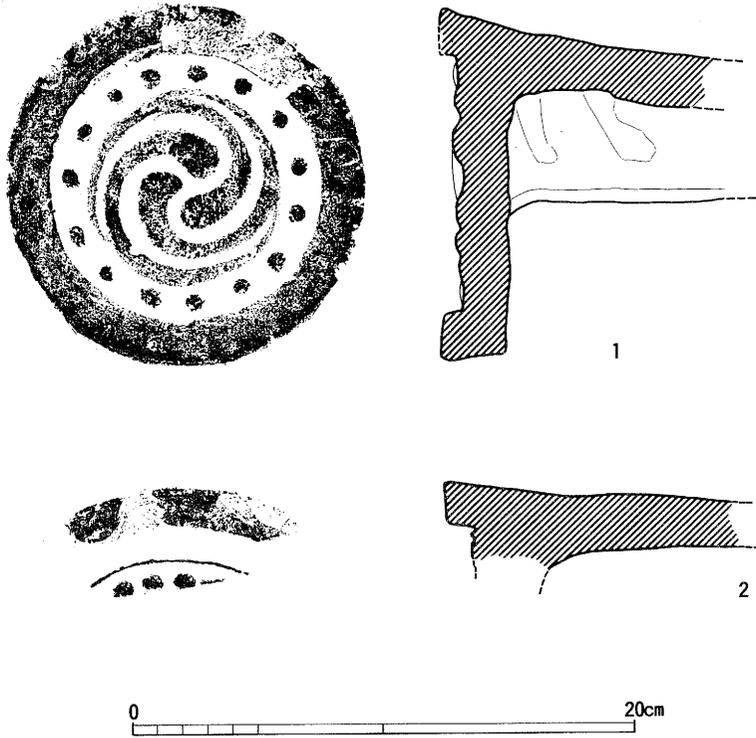
3. 遺物（PL.8・9・25～28、第8～10図）

下層包含層から整理コンテナで約10箱におよぶ土器・瓦類が出土した。内容は陶器、磁器、中世軒瓦、中世平・丸瓦、近世瓦片、および道具瓦（鬼瓦）である。以下、順に説明を加えたい。なお、整理期間の短さから、これまで市域内外で出土した軒瓦類との比較検討はおこなえなかった。今後の調査に委ねることとしたい。

軒丸瓦（第8図、PL.26）

巴文のみ数点出土したが、珠文外側の圏線の有無によって、少なくとも2型式に分類できた。さらに、珠文の個数によってさらに細分される可能性があるが、みな小片のため珠文の全体数を復原できないため、今回はおこなわなかった。

1は圏線を持たない。丸みを帯びた巴の頭部は、やや尖り気味である。外縁



第8図 岡中遺跡89-2区出土の軒丸瓦

は幅広で低い。硬質の製品。圏線をもつもの(2)は、胎土に暗灰色のクサリ礫を多量に含む軟質の製品で、外縁も高い。圏線を持たない1よりも確実に古相を示している。

軒平瓦(第9図、PL.26)

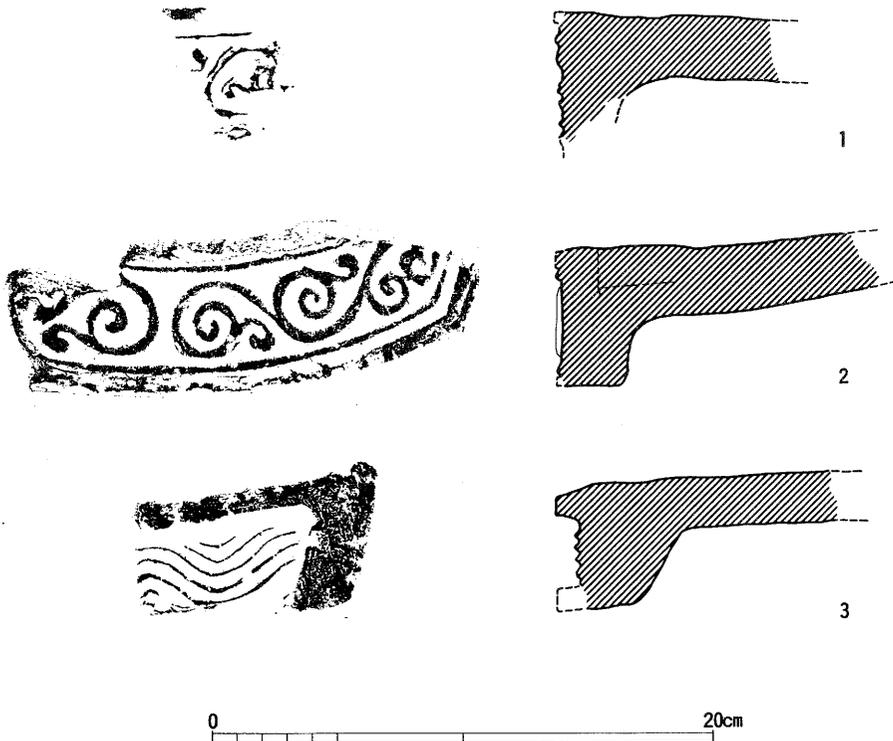
唐草文2点、波形文1点が出土した。

1は瓦当のごく一部のみ出土したもので、かなり筈ズレした唐草文が判別できる。幅の狭い上縁と圏線がわずかに残っている。瓦当面は比較的幅広で、薄い顎部は指でナデつけるのみの簡単な調整が施されている。胎土には礫が多く含まれる。軟質の製品。

2は均整唐草文が表現されている。太く力強い唐草が、片側に3回反転する型式である。周囲を区画する圏線もまた太いものである。外縁は幅狭だがしっかりした造りである。瓦当部は厚く顎部には丁寧なナデ調整が施される。軟質

だが全体に丁寧で、しっかりした印象を受ける製品である。

3は5条の凸線で構成される波形文を持つ。顎部は厚くつくられているが、ヘラケズリでシャープに削り出されている。やや軟質で淡橙灰色の製品。



第9図 岡中遺跡89-2区出土の軒平瓦

平瓦 (PL. 9・27・28)

平瓦が出土遺物の大半を占める。胎土、調整、法量から、5型式に分類できた。

1は胎土に大量の橙色クサリ礫をふくむ。凸面はナデが施されている。軟質の製品である。

2は凸面に斜格子叩き痕が残る。硬質の製品。胎土には暗灰色クサリ礫が大量に混入している。

3は凸面に平行縄叩きが施され、その後のナデ調整を省略している。胎土にはめだった砂粒は認められないが、焼きは甘く軟質の製品。

4は厚手の製品で凸面に板ナデ調整が行われる。胎土には砂粒が若干含まれるが、焼成は良好で硬質の製品。

5・6は同一型式である。厚手で、凹凸両面に離れ砂が認められる。また、側端はほぼ平行で、破片では広端・狭端の区別が困難である。焼成は良好で硬質。この型式が、今回出土した平瓦の大半を占める。

丸瓦（PL.9・26）

丸瓦はいわゆる行基式は出土せず、すべて玉縁を持つものであった。玉縁の型式、および丸瓦部の調整から3型式に分類できた。

7の玉縁は、丸瓦部と同じ幅をもち、薄く補強のための粘土もほとんど用いられない。丸瓦部凸面は丁寧にナデ調整が施される。焼き歪がひどいことと、破片のため全形を知り得ないが、広端・狭端の幅の差が認められるかもしれない。硬質の製品。

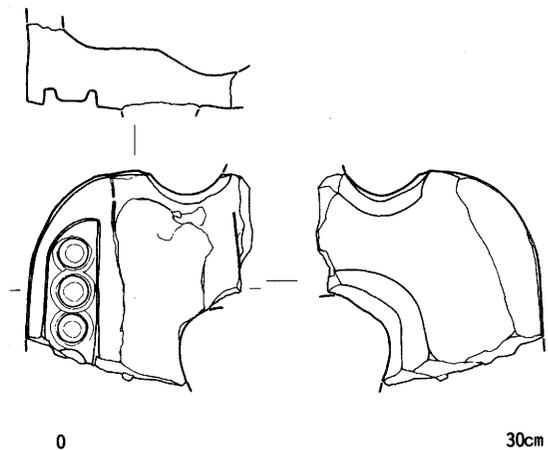
8は半裁筒状の丸瓦部に、幅狭の玉縁部がつけられる。丸瓦部凸面は平行縄叩きが施された後、簡単にナデが行われている。焼きは甘く軟質。

9は8と形状・法量ともほとんど変わらない。ただし、凸面には縦方向にヘラミガキが施される。焼成も良好で、硬質の製品。

7の法量は不明だが、8・9はほぼ同一法量となり、同時期に製作・使用されている、あるいは同一建物の葺換え・補修瓦の可能性があろう。

道具瓦（第10図）

鬼瓦が1点出土した。装飾は大半が剥離しており、わずかに連珠文の一部が残る。復原すると、頂部にはえぐりが2カ所施される。外面は全体にナデ調整で仕上げられる。胎土には若干の砂粒を含む、硬質の製品。



第10図 岡中遺跡89-2区出土の鬼瓦

土器はごくわずか出土したに過ぎない。図化に耐えたものはさらに少なく10点に満たなかった。

21は陶器・鉢の口縁部、22は陶器体部片である。甕であろうか。23は市域でよくみられる器壁が非常に厚い瓦質土器のすり鉢である。出土例は海会寺跡、男里遺跡などがある。24は磁器・椀、25は陶器・壺だろうか。どちらも近世の所産だろう。

第4節 88-3区の調査(PL.6・20、第6図)

位置的には、遺跡中央やや北よりの地点で、集落遺構の存在を想定していた部分にあたる。

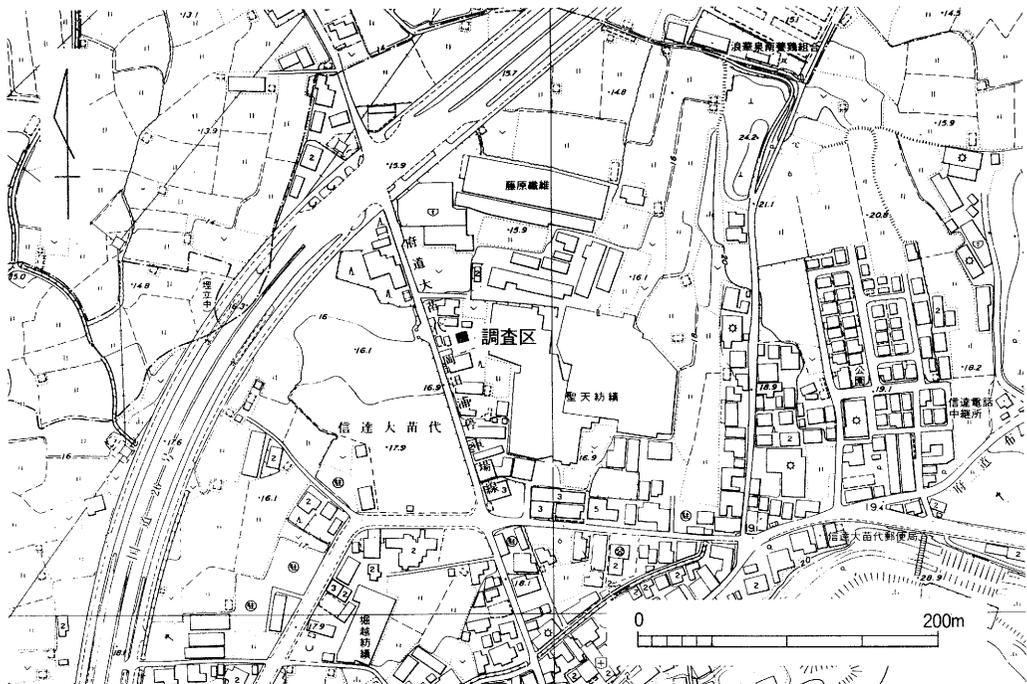
基本的な層序は、盛土をのぞき、旧耕土・床土層、黒褐色粘質土、礫層、砂層に分けられる。旧耕土層には部分的あるいはブロック状に、やや土色・土質の異なる部分が見受けられるが、基本的に上記の4層に分かれるものとしてよい。このうち遺物が出土するのは黒褐色粘質土だが、わずかに土師器の極細片が数片認められるのみである。器形の判別が可能な遺物は出土しなかった。

遺構についてはまったく確認できなかった。

第5章 北野遺跡の調査

第1節 既往の調査（第11図）

北野遺跡における発掘調査はこれまでさほど行われていない。80年度の調査では遺跡のほぼ中央で、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝が確認されている。また1982年の調査では、遺跡の南東縁付近で遺物包含層の存在が発見された。1986年には遺跡西部の調査において、2カ所でピットが検出されている。わずかにこれだけの点的調査が行われてきたに過ぎない。



第11図 北野遺跡調査区位置図

しかし、得られたデータから、遺物包含層は遺跡のほぼ全体に残存していることが判明している。また、当地における洪積段丘中位面開発の初源は、平安時代後期にまで遡り得ることが論じられている。

泉南市域では男里川流域でみられるように沖積段丘面に展開する遺跡が多く、洪積段丘中位面上に立地する遺跡は比較的少ない。この事から、中位面に生活

活動の場が求められる時期、あるいはその過程を知る機会が少なかった。しかし北野遺跡では、平安時代後期には確実になんらかの人間活動がなされている。今後、当遺跡からのデータが増加すれば、中位段丘面開発の具体像に迫ることができるであろう。

第2節 89-1区の調査(PL.5・8・20、第11図)

調査区の位置は、遺跡の中央やや西よりにあたる。地形分類上は洪積段丘中位段丘面上に立地する。

基本的な層序は上から、盛土、床土、黄色系砂質土、マンガン斑混じり灰色系土、灰色混じり暗黄色粘土、そして地山の黄色粘土へと続いていく。

遺物が出土するのは黄色系砂質土及び、マンガン斑混じり灰色系土であるが、遺物の分布密度は非常に低い。このほか地山直上層からは、遺物は出土しなかった。また各層の上面において、遺構はまったく確認できなかった。

遺物は、わずかに須恵器・杯・甕片がそれぞれ数点出土したのみである。大半が図化不可能な細片だった。26は低い高台のつく須恵器・杯の底部である。胎土は精良で焼成は良好、軟質の製品である。

第6章 岡田遺跡の調査

第1節 既往の調査（第12図）

遺跡の位置は市域でも北部、海岸に近い洪積段丘の中位段丘面上に立地している。その規模は南北 650 m、東西 450 m に及ぶ。分布調査によって新規発見されてから日が浅く、まったく調査が行われていなかったため、その性格については白紙の状態であった。しかし今年度、初めての調査が行われ、中世遺物の包含層が確認されるなど、その内容把握が除々にではあるが確実に進んで来ている。



第12図 岡田遺跡調査区位置図

第2節 89-1区の調査（PL.6・21、第12図）

当遺跡での初めての発掘調査である。遺跡の中央南よりに位置している。ち

ようど市道である中小路・岡田・樽井線に面している部分での調査となった。地形分類上は、洪積段丘中位面上に立地している。

層序は、上から盛土、耕土・床土層、褐色混じり淡灰色土、黄色粘土混じり淡灰褐色土、淡灰白色粘土がみられ、地山である灰色混じり黄色粘土につづいていく。遺物は床土直下層から地山直上層までの3層から出土する。

遺構は確認できなかったが、中世遺物包含層の存在を確認した。

遺物は褐色混じり淡灰色土から土師器・皿の小片が出土した。いわゆる白土器である。細片のため、図化はできなかった。

第3節 89-2区の調査(PL.6・21、第12図)

2区は遺跡の東縁付近に位置している。現在の南海本線岡田浦駅から南へ約350m隔てた地点である。岡田集落の南西端付近にあたる部分である。

層序は盛土を除いて、上から黄灰色砂、暗黄灰色粘土、黄灰色粘土、赤黄褐色粘土の地山となる。このうち遺物が含まれていたのは、暗黄灰色粘土であるが、すべて細片で取り上げることは不可能だった。

遺構はその存在を確認することができなかった。

第7章 海会寺跡の調査

第1節 既往の調査（第13図）

海会寺跡の調査は神社地内・外の調査に大きく二分できる。前者では、大阪府教委・泉南市教委の発掘調査を通じて、白鳳伽藍と寺院建立氏族の集落の内容を明らかにすることができた。その重要性が評価され、国史跡の指定を受けたことはまだ記憶に新しい。

ただし、その内容についても、寺院焼亡時期や僧坊など雑舎群の所在など、まだまだ解明しなければならない問題は多い。

また、この調査当時から海会寺創建時の軒丸瓦が、摂津・四天王寺や大和・木之本廃寺のものと同筈関係にあることが判明していたが、最近の研究によると木之本廃寺は初の官大寺である「百済大寺」に比定されている。百済大寺・四天王寺と同筈関係にある軒丸瓦が、遠く和泉の海会寺に使用されていたのはいかなる理由によるものか。遺物面の調査・研究も開始されたばかりである。

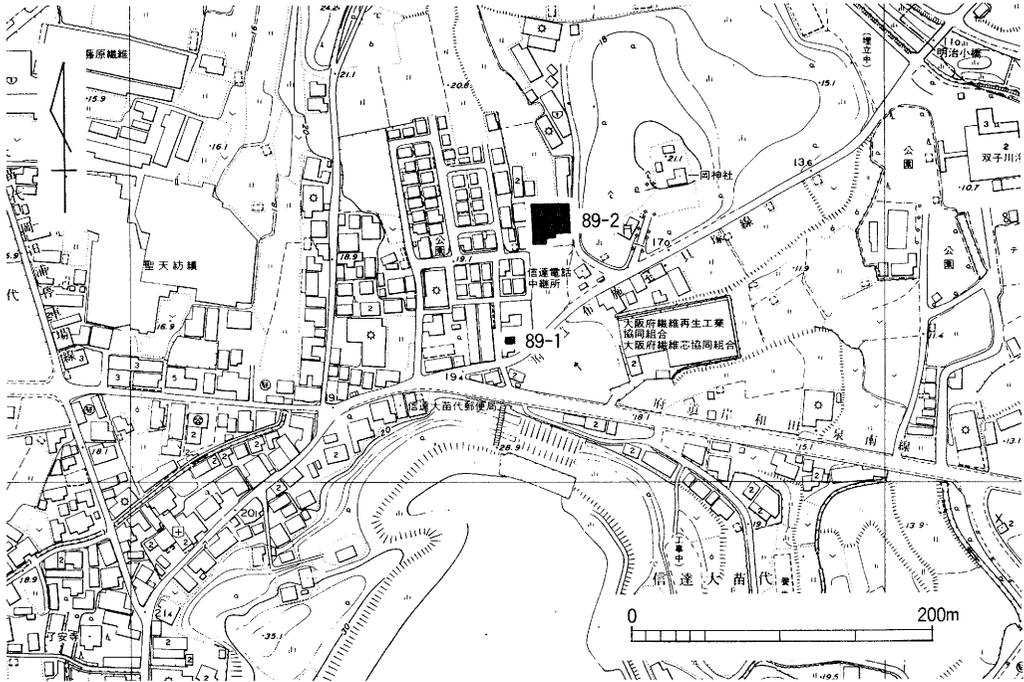
さて、神社地外の調査は規模・件数ともに少なく、これまでに立会調査が数件おこなわれたほか、大阪府教育委員会が1回の発掘調査を行ったに過ぎない。寺域の南縁、南門の南方で行われたこの調査では、多量の瓦片の出土をみ、土坑などが確認されている。この遺構群の性格は不明だが、寺院に伴う遺構である可能性も考えられる。

このように、海会寺跡についての諸問題は山積しており今後の調査・研究の進展に期待される部分は、はなはだ大きいと言えよう。

第2節 89-1区の調査

1. 位置（第13図）

遺跡の西南端付近に位置しており、戦後まで「稻荷山」とよばれる低丘陵が存在した地点にあたる。事実、ここより北側の隣接地では、表土下が即地山と言う状況が確認され、戦後の開発で大きく地形が改変されている。

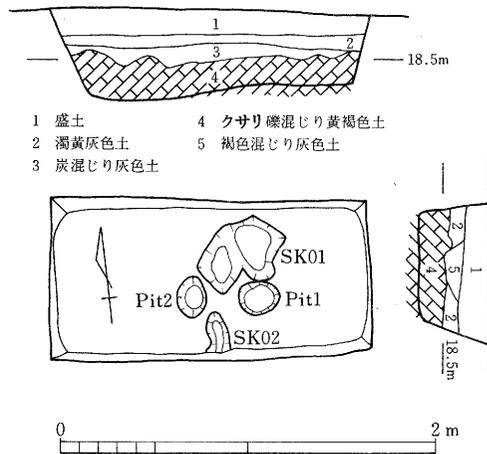


第13図 海会寺跡調査区位置図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 22、第14図)

盛土を取り除くと、上層より暗黄灰色土、炭混じりの灰色土、そして地山である黄色～白色の粘土層とつづいていく。遺物は炭混じり灰色土から磁器片がごくわずか出土したにとどまる。

遺構は地山上面で確認されている。遺構埋土から遺物は出土しなかった。



第14図 海会寺跡89-1区遺構図および断面図

3. 遺構 (PL. 22、第14図)

遺構はピット及び土坑が検出された。ピットは直径20cm内外、深さ数cmを測る。土坑は直径50cm、深さ10cmを測る。遺構の埋土はすべて褐色混じり淡灰色土である。土坑についてはその性格はまったく不明である。

第8章 兎田遺跡の調査

第1節 既往の調査（第15図）

泉南市の東縁中央、泉佐野市との境界に面した小平地の一角を現在の兎田集落は占地している。この小平地は北と東を蛇行する檜井川、南と西を丘陵によって周囲から「隔絶」されている。これまでこの地では遺物の散布がほとんど見られず、埋蔵文化財包蔵地として確認されていなかった。

遺跡発見の契機は、兎田集落内の開発である。これに伴う泉南市教委の試掘調査によって中世遺物包含層が確認され、同時に周辺の分布調査をおこない遺物散布範囲を確認した。この成果から兎田集落を中心とする一帯が、兎田遺跡として周知されるに至った。

次に周辺の環境について概観しておこう。

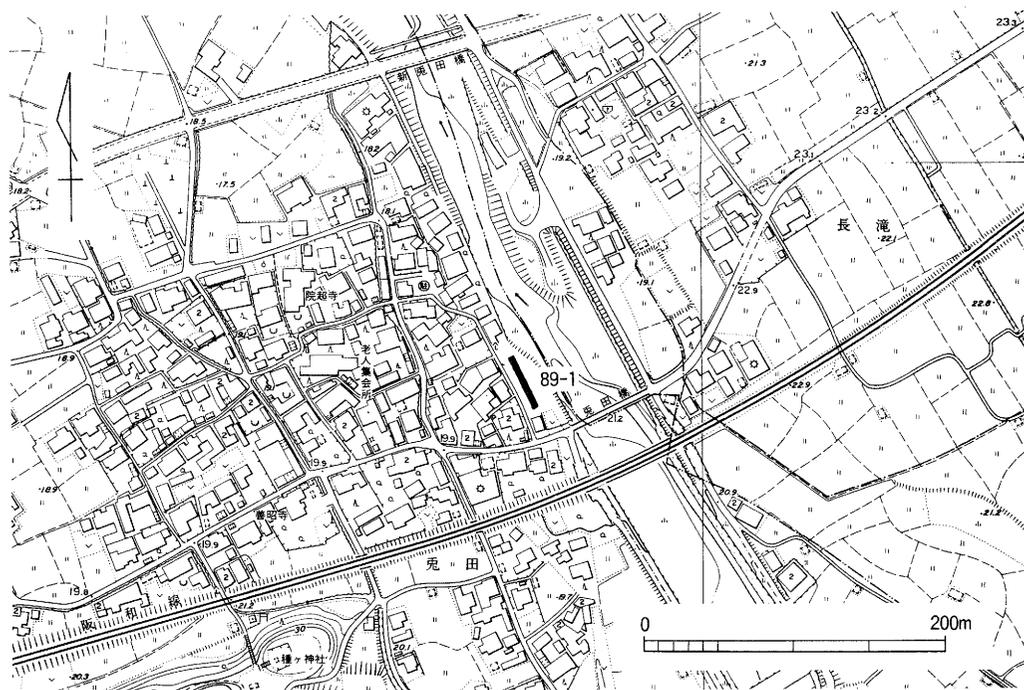
兎田遺跡の西に長くのびる丘陵は、泉南市における古墳の密集地である。丘陵基部から先端に向かってフキアゲ山古墳群、兎田古墳群、新家古墳群などが立地している。また、同じ丘陵上には弥生時代集落が確認されたオドリ山遺跡が存在する。この西麓段丘面上では、同じく弥生時代に属する新家遺跡が近年発見されている。今のところこれらの遺跡群は、その内容があきらかにされていないものが多い。

これに対し檜井川の右岸の状況はどうだろうか。現在の行政区分では泉佐野市に属しており、広大な平野が展開している。ここでは三軒屋遺跡がよく知られている。古くから調査が行われており、沖積段丘面上が縄文時代以降連続と生活の場となっていたことが判明している。

兎田遺跡の東西にある遺跡は以上のようなものだが、まだ不分明な部分が多いのが現状である。例えば古墳群造営集団の集落などは、今のところ三軒屋遺跡内に求めるむきが多い。これにもかかわらず、両者間の有機的関係について積極的に論じられていないように思える。やはり絶対的なデータの不足からくる歴史資料の少なさが原因だろう。今後の調査・研究に期待したい。

第2節 89-1区の調査(PL.6・22、第15図)

本年度は、兎田遺跡における発掘調査は1件となった。その位置は遺跡の東端、櫛井川の左岸自然堤防上にあたる。



第15図 兎田遺跡調査区位置図

調査地はもともと、崩れさった堤防に盛土をおこなってできた土地のため、非常に軟弱で分厚い盛土が観察された。これらを取り除くと基本的に、旧表土である灰色混じり黄色砂、淡茶灰色砂、その下層の地山(淡黄灰色砂)の、合計3層から構成されている。そしてこれらの間の一部分に、若干の砂層などが介在するという状況である。遺物包含層と認識できる土層は存在しない。

遺物・遺構はどちらもまったく確認されなかった。

第9章 仏性寺跡の調査

第1節 既往の調査（第16図）

仏性寺跡で行われてきた調査は非常に少ない。これまでに蓄積されたデータでは、平安時代から室町時代にいたる複数遺構面が存在すること、中世の所産となる瓦辺片が出土することなどが知られているに過ぎなかった。

昭和62年度におこなった調査により、初めて寺院に直接関係すると考えられる整地層や、池の護岸状の積石遺構、礎石状の配石遺構などが確認された。しかし、これもまた、寺院のどの部位でどのような性格を持ったものかは不明のままである。

このように仏性寺跡の調査・研究については、データ収集が始まったばかりとの観が強い。今後の調査においては、「データを積み上げる」との意識を強くもってのぞまねばならないだろう。

第2節 調査の成果

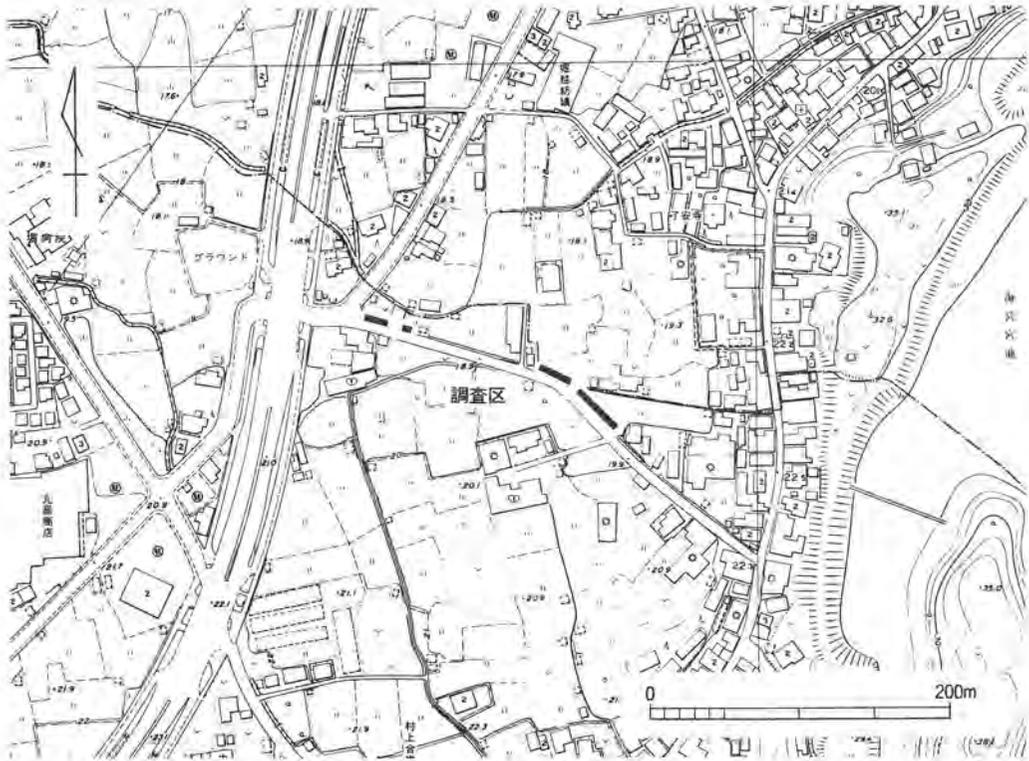
1. 位置（第16図）

現在、市道赤井神社線が遺跡を東西に横断している。当調査ではこの道路に沿って8カ所の調査区を設定した。ここではそれぞれの調査区を東から1区2区…8区と呼ぶことにする。

2. 層位と遺物の出土状況（PL.7、第16図）

1・2区では基本的に、上から現耕土・床土層、旧耕土・床土層、そして中世遺物包含層である褐色混じり灰色砂質土、地山の黄橙色系粘土へという堆積をみせる。

3・4区では1・2区と同様な層序を確認できたが、ここでは地山は赤褐色系の礫層に変化している。また、中世遺物包含層は、暗灰色系の粘土となる。この層序は87年に個人住宅の調査で観察されたものと非常によく似ている。



第16図 仏性寺跡調査区位置図

5～8区では、耕土・床土、暗灰色系礫層、礫混じりの灰色粘土、地山は赤褐色系の礫層が観察された。また、一部では、地山直上に灰色系粘土の遺物包含層も確認された。

以上、設定した調査区の大半で遺物包含層を確認でき、遺跡内での包含層の分布状況を知ることができた。遺物については出土しても取り上げることが不可能な細片が多く、その保存状態は非常に悪いものである。

3. 遺構 (PL. 23・24)

遺構はほとんど確認できなかった。わずかに断面観察でピットが数カ所確認できたのみである。期待していた寺院関係遺構はまったく確認できなかった。

4. 遺物 (PL. 8・20)

遺物は包含層から、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、軒瓦、

平・丸瓦などが出土している。総数では整理用コンテナ1箱分が出土した。その大半が余りの摩滅と細片であるため、図化に耐えなかった。

27は東播磨系の須恵器・こね鉢である。口縁端部を外方に肥厚させ、端部に面をもたせている。焼成は良好で硬質、口縁端部外面には重ね焼きの痕跡が明瞭に残っている。

28・29・30は瓦質土器・土釜である。3点とも体部外面はヘラケズリで器壁を薄く仕上げている。鏝より下方はススが付着している。

第10章 まとめ

平成元年度（平成2年2月28日現在）における遺跡内での発掘届出および通知は、第1表に示したとおり70件の多きを数える。この数値は、前年度52件に対して18件の増である。勿論すべて発掘調査で対処しているわけではないが、ここ数年の届出および通知の増加率は、前年度比40～50%といった急激な上昇率を示している。

このことは、開発行為に先行する包蔵地有無確認の事前試掘調査が、年々倍増していることと呼応しており、本市における開発進捗が関西国際空港建設計画などに伴い荒波のように押し寄せてきているという現象が、如実にあらわれている。

こうした本市文化財保護活用行政の状況下、今年度も市内各遺跡において29カ所の発掘調査を行いその内容究明に努めた。その内訳は、第2表に記したごとく男里遺跡16カ所、幡代遺跡2カ所、岡中遺跡4カ所、北野遺跡1カ所、岡田遺跡2カ所、海会寺跡2カ所、新家オドリ山遺跡1カ所、兎田遺跡1カ所である。いずれも個人住宅建設を中心としたもので、一部を除き調査面積はさほど大きくはない。とはいっても決して与えられた情報は、少なくなかった。

なお、本書においては前年度調査未報告分の男里遺跡3カ所（88-16～18区）、岡中遺跡1カ所（88-3区）、仏性寺跡1カ所（88年度調査区）についても併わせて掲載している。この成果もふくめ、以下順をおって説明していくこととする。

男里遺跡は地形分類上、男里川右岸に展開する自然堤防、氾濫原、沖積段丘などにかけての広がりをもっている。今回の調査区を地形分類上の立地別に分けてみると、89-1～5・14・15区が沖積段丘の縁辺、89-6区が氾濫原、89-7～12・88-16～18区が自然堤防上、89-13・16区が旧河道の位置にあっている。

89-1区からはピットおよび土坑が検出された。ピットは柱痕跡をとどめているものがあり、掘立柱建物の存在が容易に考えられる。柱穴内より瓦器碗と思われる破片が一点出土しており、柱掘形の形態などから考え合わせても中世の所産になると推測して差支えないだろう。

この周辺では調査例が少なかったこともあるが、柱痕跡を伴う中世掘立柱建物跡と思われる遺構が検出されたのは初めてのことである。付近は地形分類上で沖積段丘の縁辺部にあたる。広がりなどは不明確であるが過去の調査データと合わせ考え、この一帯に一つの単位をもった中世集落の展開の一端を垣間みることができたと言えよう。

男里遺跡における平安後期以降の集落は、現在までの調査知見から、男里川の氾濫によって形成された自然堤防上を中心とした地点に占地することが、明らかになっていた。今回の調査により遺跡の東端を占める沖積段丘上でも、当該期の集落の存在が明確化してきた。このことは、遺跡の西端に位置する平安後期創建の光平寺跡の周囲に展開する集落と、一定の距離を隔てた（といってもさほど離れているわけではないが）寺院を伴わない集落との関係を探る上で、非常に有意義な資料の獲得であった。

89-7区で検出されたピットは、一辺約45cmで方形を呈するものである。埋土から遺物の出土が無く決定的なことは言えないが、その形態から奈良時代の柱掘形になるかもしれない。この調査区の西南西約85m地点に位置する89-9区からは、同時代の遺物包含層の存在が確認されており、今後の調査で明確な建物遺構などが検出される可能性は大きいと思われる。

89-8区からは土師器、瓦器・椀の日常雑器のほか、土師器・蛸壺の漁具など中世の所産になる遺物を伴うピット、土坑、溝が検出された。この調査区より西側一帯においては、先年の断片的な調査で鎌倉・室町時代を中心とした掘立柱建物跡などの存在が確認されている。しかし東側からは当該期の遺構は顕著には検出されていない。おそらくは水田を主にした生産地であったのであろう。

このほか時期決定はしがたいものの89-2・89-10区から土坑および溝などの遺構が、その他の調査区からは良好な遺物包含層が検出されている。これらもまた今後、周辺調査を行っていくうえで不可欠な資料となるであろう。

幡代遺跡においては、今年度2カ所の調査を実施したが、いかんせん小面積な調査ということもあり、残念ながら遺構および遺物は全く検出されなかった。

当遺跡は、平安後期創建の寺院と同時期の集落の存在が推定されているのみで、まだまだ詳細なデータは整っていないが、屋瓦類の出土を寺域推定のひと

つの手掛かりとするなら、この付近は寺域の南限より外を示すこととなる。

岡中遺跡は前年度の調査（88年度調査区）によって、初めて寺院の建物に伴う遺構（堂塔に伴う基壇痕跡）が確認されている。今回の調査区の内89-2区は、これよりわずか35m南西の指呼の間にあり、おのずと期待を膨らませる調査であった。しかし、期待とは裏腹に遺構は検出されなかった。ただ、多量に出土した中世瓦は、寺院の消長を知るうえで貴重な資料追加となりうるものである。

北野遺跡は後述する仏性寺跡と同様、洪積段丘中位面の縁辺に立地し、平安後期より集落の営為が始められたことが周知されていた遺跡である。今年度はただ1カ所のみの実施であったが、非常に興味深い発見をすることができた。

それは一片のみの出土であるが、奈良時代の須恵器・杯の発見である。遺構は検出されていないものの、この遺跡の始まりが奈良時代まで遡るという可能性を十分与えるものである。そうすると従来から考えられていたこの地域の段丘開発の開始時期が、当該期まで求められることになる。今後、住居跡などの明確な遺構の検出が期待される。

岡田遺跡は近年、中世遺物の散布などから周知されるに至った遺跡であり、89-1区が発掘調査の嚆矢となった。調査は89-2区と2カ所行ったが、いずれも遺構は検出されなかった。しかし、中世包含層の存在が確認できたことは今後の調査に期待がもたれるものである。

遺跡は洪積段丘中位面の縁辺に立地している。同様に立地する遺跡には上述したごとく北野遺跡、仏性寺跡などがあるが、各遺跡の実態解明と同時に遺跡相互の比較検討が、段丘開発における歴史的な背景を探る近道になると考えられるのではないだろうか。

海会寺跡は改めて述べるまでもなく、国史跡に指定されている白鳳時代創建の寺院である。今年度の調査は、寺域の推定西限に近接した箇所（89-2区）と寺域外の南西方向に位置する調査区（89-1区）の2カ所において実施した。

そのうち2区については、別書報告であるので、ここでは1区についてのみ触れることとする。触れるといっても、出土遺物がまったくないピットおよび土坑を検出しているのみで、多くを語るすべはない。しかし検出した遺構はその上層出土遺物などを参考にすると、中近世という幅をもたせた時期ではある

が、与えられそうである。

海会寺および隣接する建立氏族の集落などの消長は既に述べられているが、周辺に展開する集落の構造や消長などは、現在皆無の状態である。そういった意味においては、遺構の分布状況の一部が確認できたことは貴重な成果と言えよう。

兎田遺跡において今回実施した調査では、残念なことに遺跡の内容を究明する資料の獲得はできなかった。現時点では、中世包含層の確認されている遺跡であるとしか言い様がなく、その実態解明はこれからである。

仏性寺跡については、幅の狭い調査区の設定ということもあって、断面観察を主においた調査となった。遺構はわずかにピットを数カ所確認したにとどまったが、幸い今回の調査が遺跡内をほぼ東西に横断するかたちとなり、包含層の広がりや地山の多様な変化などを知ることができた。

以上、各遺跡ごとに調査の結果をまとめてきたわけであるが、当然のごとく今回の成果だけでは、まだまだ不十分の感は否めない。たとえば遺跡範囲の確定、あるいは構造の把握、そして遺跡の消長といったものに言及するには、今一步かもしれない。しかし、小規模な調査でも年々確実にそして着実にそれらの内容究明へとアプローチしうるデータの蓄積はある。

我々は、獲得されたデータのあらゆる比較検討をおこない、より正確な内容の究明に努めなくてはならない責務があることを心に念じ、報告の終わりとしたい。

第5表 文化財一覽表

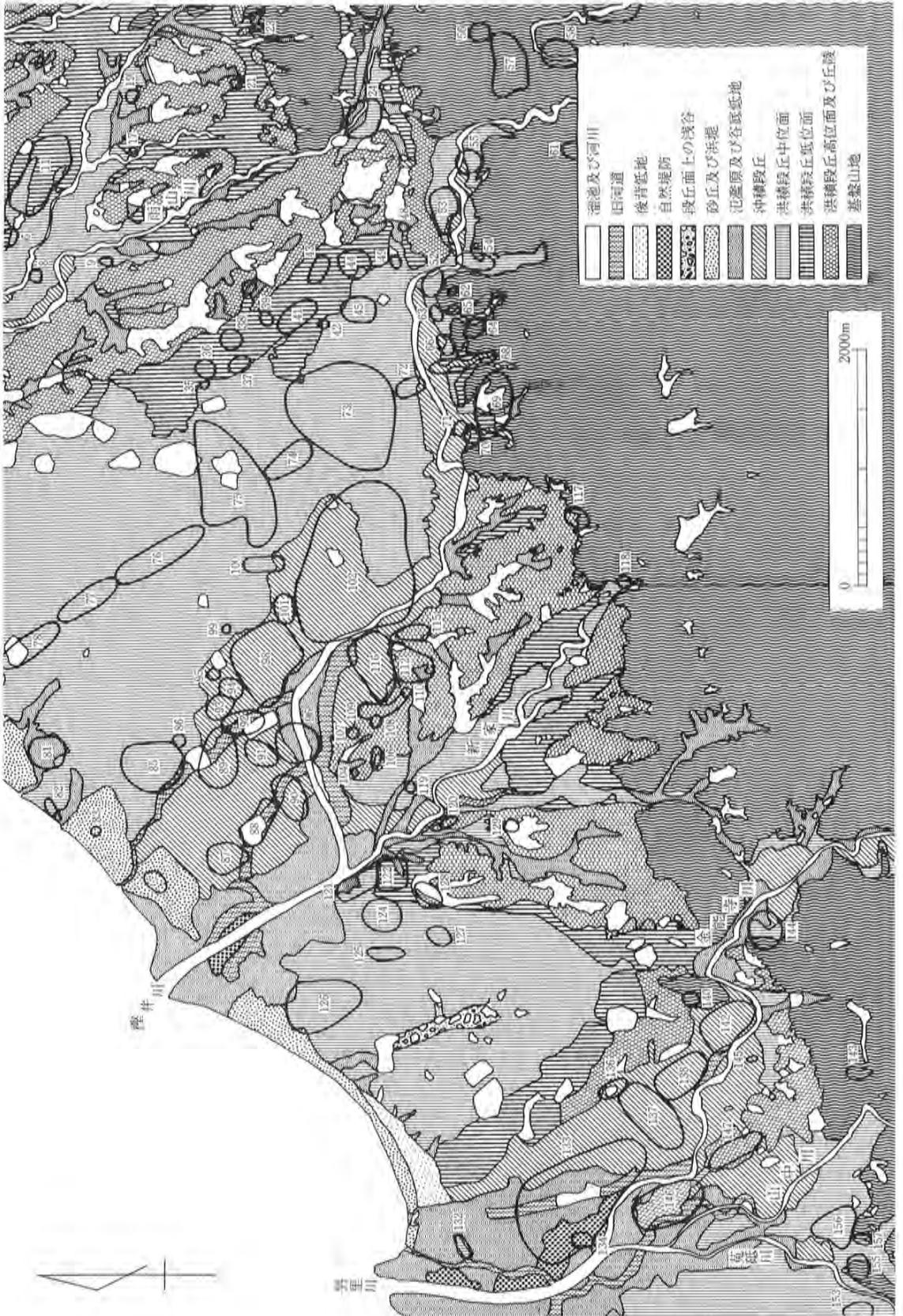
1	千石堀城跡	41	大坪遺跡	81	羽倉崎東遺跡	121	一丘神社遺跡
2	白地谷遺跡	42	宮の前遺跡	82	羽倉崎遺跡	122	海会寺跡
3	正法寺跡	43	市堂遺跡	83	嘉祥寺神社本殿	123	厩戸王子跡
4	大谷池遺跡	44	北之前遺跡	84	羽倉崎上町遺跡	124	北野遺跡
5	大久保B遺跡	45	野々宮遺跡	85	船岡山遺跡	125	中小路遺跡
6	紺屋遺跡	46	総福寺天満宮本殿	86	岡本麁寺	126	岡田遺跡
7	降井家書院	47	垣外遺跡	87	田尻遺跡	127	仏性寺跡
8	降井家屋敷跡	48	屯田遺跡	88	夫婦池遺跡	128	海管宮池遺跡
9	大久保A遺跡	49	八王子遺跡	89	船岡山南遺跡	129	狐池遺跡
10	中家住宅	50	慈眼院金堂・多宝塔	90	櫻井西遺跡	130	高倉山東遺跡
11	東門寺遺跡	51	日根神社遺跡	91	藤波遺跡	131	信ノ池遺跡
12	小垣内遺跡	52	西ノ上遺跡	92	道ノ池遺跡	132	天神ノ森遺跡
13	金剛法寺跡	53	土丸遺跡	93	岡ノ崎遺跡	133	男里遺跡
14	久保城跡	54	笹ノ山遺跡	94	中葛蒲遺跡	134	光平寺跡
15	甲田小春家住宅	55	土丸南遺跡	95	岸ノ下遺跡	135	光平寺石造五輪塔
16	五門北古墳	56	雨山城跡	96	櫻井城跡	136	前田池遺跡
17	五門遺跡	57	土丸城跡	97	奥家住宅	137	幡代遺跡
18	五門古墳	58	下大木遺跡	98	諸目遺跡	138	幡代南遺跡
19	大浦中世墓地	59	大木遺跡	99	椽ノ塚古墳	139	林昌寺銅鐸出土地
20	鳥羽殿城跡	60	中大木遺跡	100	禪興寺跡	140	林昌寺跡
21	来迎寺	61	稲倉池北方遺跡	101	ダイジョウ寺跡	141	林昌寺瓦窯
22	山ノ下城跡	62	鏡塚古墳	102	三軒屋遺跡	142	岡中遺跡
23	碁の谷遺跡	63	川原遺跡	103	上之郷遺跡	143	岡中西遺跡
24	池ノ谷遺跡	64	向井山遺跡	104	下村1号墳	144	滑瀬遺跡
25	成合寺遺跡	65	梨谷遺跡	105	下村2号墳	145	雨山南遺跡
26	山出遺跡	66	母山遺跡	106	新家オドリ山遺跡	146	雨山遺跡
27	湊遺跡	67	母山近世築地	107	新家オドリ山東遺跡	147	高田山古墳群
28	檀波羅齋寺跡	68	棚原遺跡	108	新家オドリ山南遺跡	148	平野寺(長楽寺)跡
29	檀波羅遺跡	69	向井池遺跡	109	新家古墳群	149	皿田池古墳
30	佐野王子跡	70	意賀美神社本殿	110	フキアゲ山西遺跡	150	神光寺(蓮池)遺跡
31	上町東遺跡	71	向井代遺跡	111	引谷池窯跡	151	三味谷遺跡
32	若宮遺跡	72	机場遺跡	112	フキアゲ山東遺跡	152	石田山遺跡
33	上町遺跡	73	日根野遺跡	113	フキアゲ山1号墳	153	井関遺跡
34	市場東遺跡	74	郷之芝遺跡	114	フキアゲ山2号墳	154	岩崎山遺跡
35	中嶋遺跡	75	植田池遺跡	115	兎田古墳群	155	寺田山遺跡
36	岡口遺跡	76	長滝遺跡	116	兎田遺跡	156	自然田遺跡
37	小塚遺跡	77	安松遺跡	117	別所遺跡	157	玉田山古墳群
38	十二谷遺跡	78	末廣遺跡	118	高野遺跡	158	玉田山遺跡
39	丁田遺跡	79	中開遺跡	119	新家遺跡	159	玉田山須恵器窯跡
40	新池尻遺跡	80	松原遺跡	120	向井山遺跡	160	三升五合山遺跡

版 図

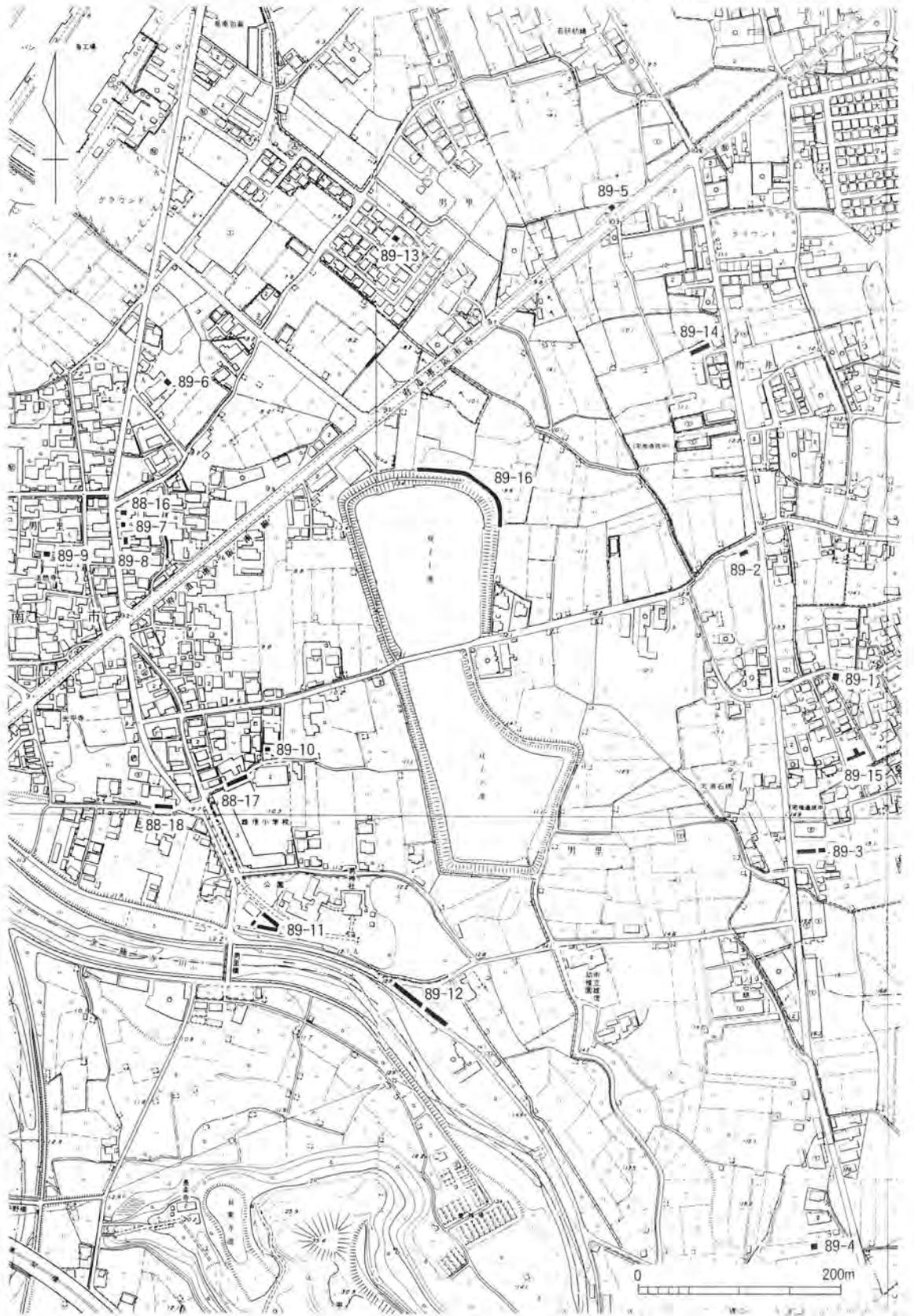
PL.1 泉南地域の文化財



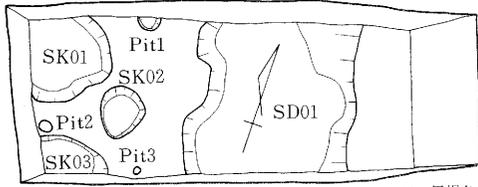
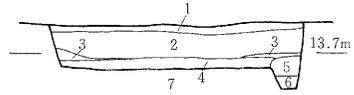
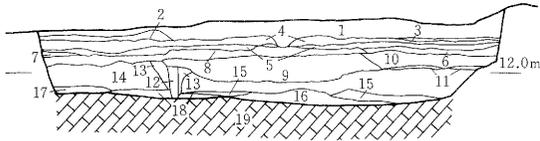
PL. 2 泉南地域の地形分類



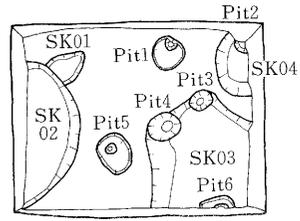
PL. 3 男里遺跡調査区位置図



PL.4 男里遺跡調査区①



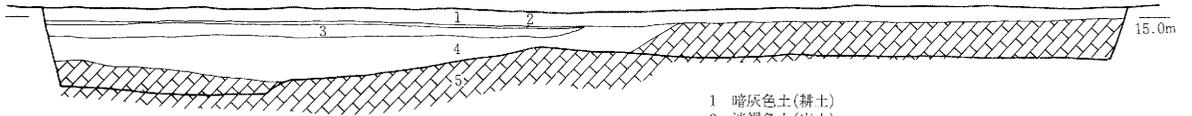
ON89-2区
平面図および
断面図



ON89-1区 平面図および断面図

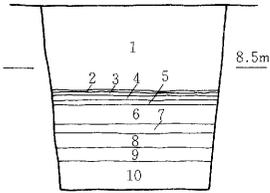
- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1 暗灰色土(耕土) | 7 褐色混じり淡灰色土 | 13 黒褐色土 |
| 2 黄褐色土(床土) | 8 灰色土 | 14 暗黒褐色土 |
| 3 淡灰色土 | 9 暗灰褐色土 | 15 暗黄茶色土 |
| 4 黄褐色混じり淡灰色土 | 10 暗灰色混じり淡灰色土 | 16 礫混じり暗黄灰色土 |
| 5 黄褐色粘質土 | 11 暗茶褐色土 | 17 黄褐色土 |
| 6 褐色混じり淡黄灰色土 | 12 暗黒褐色土 | 18 黄褐色土 |
| | | 19 黄褐色粘土 |

- | | |
|---------|--------------|
| 1 盛土 | 5 橙色粘土混じり焼土層 |
| 2 黄灰色土 | 6 黒褐色土 |
| 3 淡黄灰色土 | 7 礫混じり淡黄灰色粘土 |
| 4 暗黄灰色土 | |



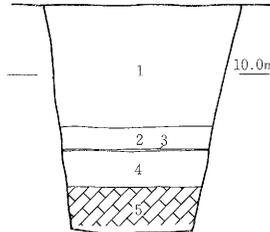
ON89-3区 北壁断面図

- | |
|------------|
| 1 暗灰色土(耕土) |
| 2 淡褐色土(床土) |
| 3 淡茶褐色土 |
| 4 茶褐色土 |
| 5 茶褐色砂礫土 |



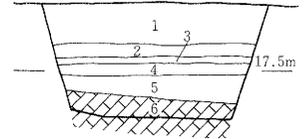
- | | |
|------------|-----------|
| 1 盛土 | 6 黄灰色砂質土 |
| 2 灰色土(耕土) | 7 黄灰色粘質砂 |
| 3 黄褐色土(床土) | 8 黄灰色粘土 |
| 4 淡灰色土 | 9 淡灰褐色土 |
| 5 淡黄褐色土 | 10 暗青灰色粘土 |

ON89-6区 北壁断面図



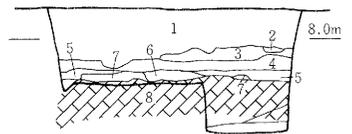
- | |
|-------------|
| 1 盛土 |
| 2 灰色土(耕土) |
| 3 黄灰褐色土 |
| 4 灰色混じり褐色土 |
| 5 円礫混じり灰黄色土 |

ON89-5区 北壁断面図

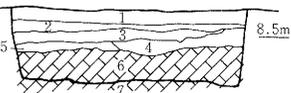


- | | |
|------------|----------|
| 1 盛土 | 4 暗灰色土 |
| 2 茶灰色土(耕土) | 5 暗黄灰色土 |
| 3 黄色粘土(床土) | 6 淡黄褐色粘土 |

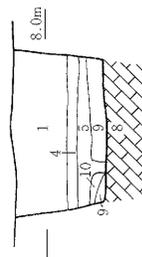
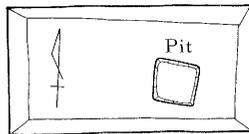
ON89-4区 北壁断面図



ON89-7区 平面図
および断面図

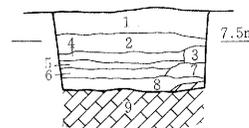


- | |
|-----------------|
| 1 盛土 |
| 2 黄灰色粘土 |
| 3 暗灰色土 |
| 4 暗茶灰色土 |
| 5 暗灰褐色土 |
| 6 暗灰褐色混じり暗黄灰色粘土 |
| 7 灰色砂含む円礫 |



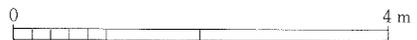
- | | |
|-----------------|-------------|
| 1 盛土 | 6 灰色混じり黄褐色土 |
| 2 暗灰色土 | 7 褐色混じり暗黄色土 |
| 3 褐色混じり暗灰色土 | 8 淡黄褐色砂質土 |
| 4 黄褐色混じり灰色土 | 9 灰褐色含礫土 |
| 5 黄色粘土混じり灰褐色砂質土 | 10 淡褐色シルト |

ON89-8区 平面図および断面図

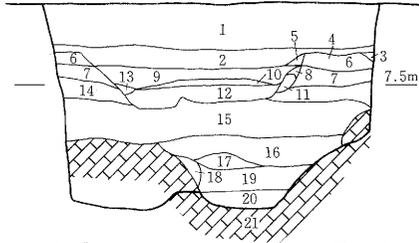


ON89-9区 東壁断面図

- | |
|-------------|
| 1 暗灰色土 |
| 2 淡黄灰色土 |
| 3 淡灰色土 |
| 4 暗灰色礫層 |
| 5 淡灰色砂質土 |
| 6 淡褐色混じり灰色土 |
| 7 淡灰白色粘質土 |
| 8 暗褐色含礫土 |
| 9 暗灰褐色礫 |

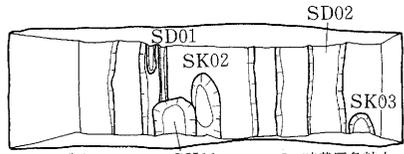
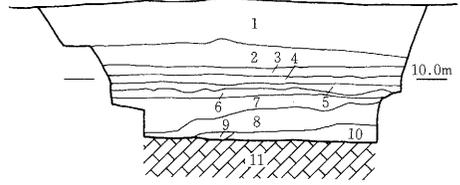


PL.5 男里遺跡調査区②・北野遺跡・幡代遺跡調査区



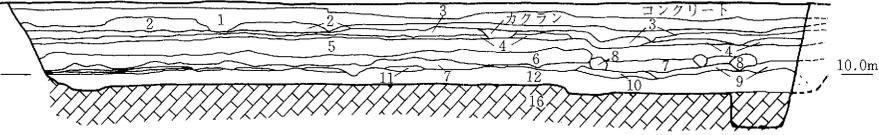
- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 盛土 | 11 暗灰褐色土 |
| 2 礫混じり淡褐色土 | 12 黒褐色土 |
| 3 礫混じり淡黒褐色土 | 13 淡黒褐色粘質土 |
| 4 淡灰褐色土 | 14 黄灰色土 |
| 5 淡黄褐色土 | 15 淡黄灰色粘質シルト |
| 6 淡黄灰色土 | 16 淡黄灰色シルト |
| 7 マンガン斑混じり淡黄灰色土 | 17 灰色シルト |
| 8 黄褐色土 | 18 淡黄褐色粘質シルト |
| 9 礫混じり暗灰色土 | 19 灰青色粘質シルト |
| 10 黄色粘土含む淡黒褐色土 | 20 細砂礫 |
| | 21 暗灰色砂礫 |

ON88-16区 南壁断面図

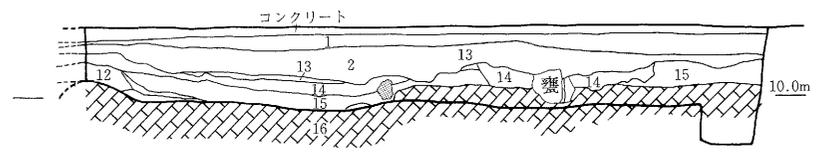


- | | | |
|-----------------|------|-----------|
| 1 盛土 | SK01 | 7 暗黄灰色粘土 |
| 2 暗灰色土(耕土) | SK02 | 8 暗灰黄色砂 |
| 3 黄色混じり淡灰色土 | SK03 | 9 暗灰色砂礫土 |
| 4 灰色混じり黄色土 | | 10 暗灰色砂 |
| 5 褐色混じり淡灰色砂質土 | | 11 暗灰色含礫土 |
| 6 マンガン斑混じり黄灰色粘土 | | |

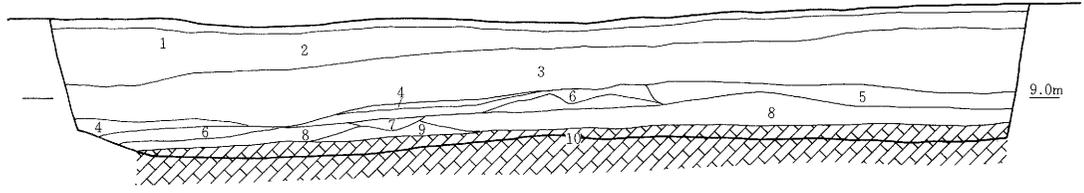
ON89-10区 平面図および断面図



ON88-17区
北壁断面図

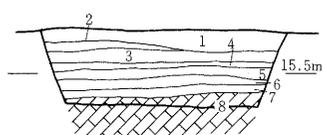


- | | | |
|-------------|--------------|-----------------|
| 1 盛土 | 7 淡灰黄色土 | 13 暗黄褐色混じり灰色シルト |
| 2 暗灰色土(耕土) | 8 灰褐色シルト | 14 黄褐色混じり淡灰色粘土 |
| 3 暗黄灰色土(床土) | 9 暗褐色混じり黄灰色土 | 15 炭混じり灰色土 |
| 4 黄褐色土 | 10 淡灰白色シルト | 16 褐色混じり黄色粘土 |
| 5 黄灰色土 | 11 淡褐色混じり灰色土 | |
| 6 灰黄色土 | 12 褐色混じり灰色土 | |



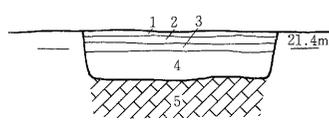
- | | |
|---------------|---------------|
| 1 暗灰色土(表土) | 6 暗黄色土 |
| 2 盛土 | 7 赤褐色混じり暗黄色粘土 |
| 3 暗灰色礫層 | 8 暗灰色砂礫 |
| 4 炭混じり暗黄灰色土 | 9 灰色礫 |
| 5 礫混じり暗黄灰色粘質土 | 10 暗灰色礫 |

ON88-18区 北壁断面図



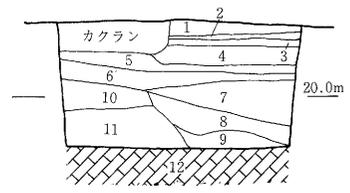
- | | |
|-----------|---------------|
| 1 盛土 | 5 マンガン混じり淡灰色土 |
| 2 黄褐色粘土 | 6 暗灰色土 |
| 3 淡赤黄色砂質土 | 7 灰色混じり暗黄色粘土 |
| 4 暗黄色砂質土 | 8 黄色粘土 |

KT89-1区 東壁断面図



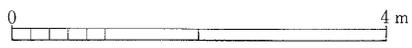
- | |
|-------------|
| 1 盛土 |
| 2 暗黄灰色土(耕土) |
| 3 灰黄色土(床土) |
| 4 灰色混じり褐色土 |
| 5 黄褐色含礫土 |

HT89-2区 北壁断面図

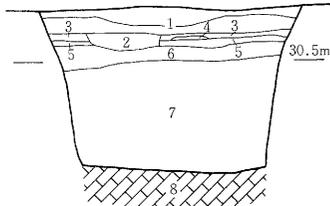


- | | |
|----------|------------|
| 1 盛土 | 7 黒褐色粘土 |
| 2 灰褐色土 | 8 淡灰色礫 |
| 3 黄褐色土 | 9 暗青灰色シルト |
| 4 黄灰色含礫土 | 10 暗黄灰色粘土 |
| 5 灰褐色粘土 | 11 暗灰黄色シルト |
| 6 暗灰褐色粘土 | 12 暗灰色含礫粘土 |

HT89-1区 東壁断面図

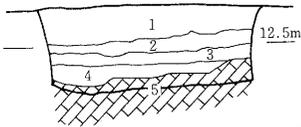


PL. 6 岡中遺跡・岡田遺跡・兔田遺跡調査区



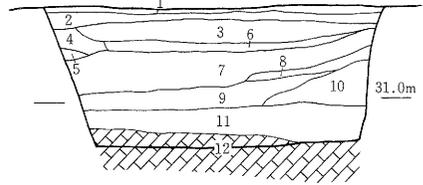
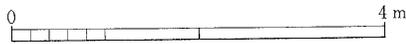
- 1 盛土
- 2 暗黄灰色土
- 3 暗灰色土
- 4 黄色混じり淡灰色土
- 5 黄色粘土
- 6 黒褐色粘質土
- 7 黒褐色礫
- 8 暗黄灰色砂

OK88-3区 東壁断面図



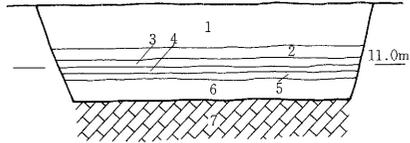
- 1 盛土
- 2 黄灰色砂
- 3 暗黄灰色粘土
- 4 黄灰色粘土
- 5 赤黄褐色粘土

OKD89-2区 東壁断面図



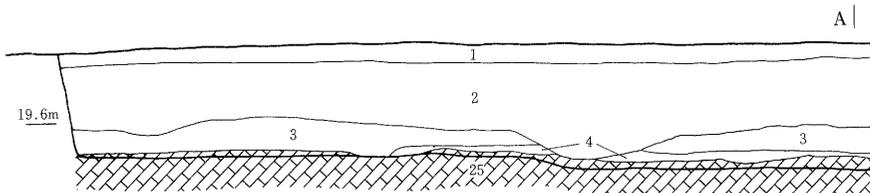
- 1 盛土
- 2 淡黄灰色土
- 3 黄灰色土
- 4 暗黄灰色土
- 5 焼土混じり暗黄灰色土
- 6 黄褐色砂
- 7 暗灰色礫
- 8 黄色粘土混じり暗灰色礫
- 9 暗黄灰色含礫土
- 10 暗灰色礫
- 11 淡灰褐色砂
- 12 暗灰色礫

OK89-2区 北壁断面図



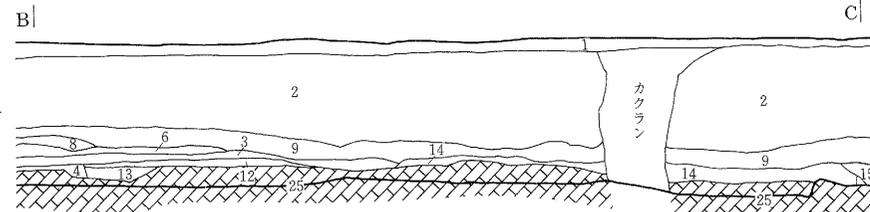
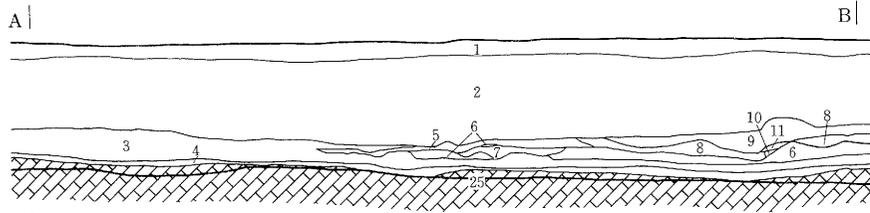
- 1 盛土
- 2 黄灰色砂質土
- 3 黄灰色粘質土
- 4 褐色混じり淡灰色土
- 5 黄色粘土混じり淡灰褐色土
- 6 淡灰白色粘土
- 7 灰色混じり黄色粘土

OKD89-1区 北壁断面図

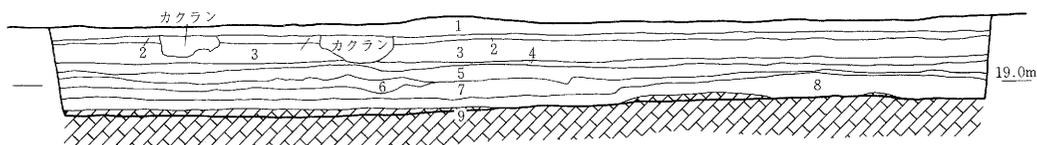


US89-1区
西壁断面図

- 1 表土
- 2 盛土
- 3 灰色混じり黄色砂
- 4 淡茶灰色砂
- 5 暗青灰色土
- 6 淡黄灰色砂
- 7 炭混じり暗灰色土
- 8 暗灰色土
- 9 暗灰色混じり暗黄色砂
- 10 灰色土
- 11 淡灰白色砂
- 12 淡黄灰色粗砂
- 13 暗灰茶色砂
- 14 暗黄灰色砂
- 15 暗黄灰色粘質砂
- 16 暗黄灰色粗砂
- 17 暗茶灰色土
- 18 暗黄灰色砂
- 19 礫混じり暗黄灰色土
- 20 暗茶灰色砂
- 21 暗灰色粗砂
- 22 暗黄色粘質土
- 23 暗灰色砂
- 24 暗黄灰色含礫土
- 25 淡黄灰色砂

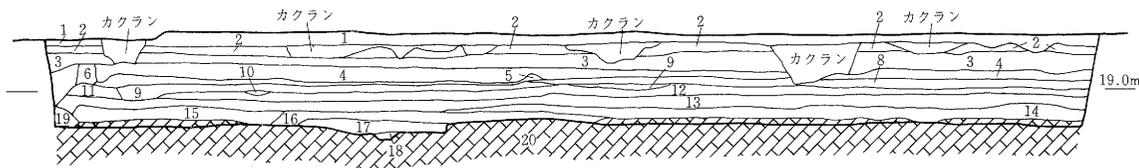


PL.7 仏性寺跡調査区北壁断面図



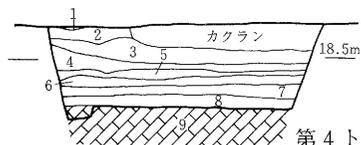
第1トレンチ

- | | |
|-------------|--------------|
| 1 暗灰色土 | 6 褐色混じり淡灰色土 |
| 2 黄橙色土 | 7 黄褐色混じり灰白色土 |
| 3 淡黄色混じり灰色土 | 8 褐色混じり灰色土 |
| 4 淡黄色土 | 9 礫混じり黄橙色粘質土 |
| 5 黄灰色土 | |



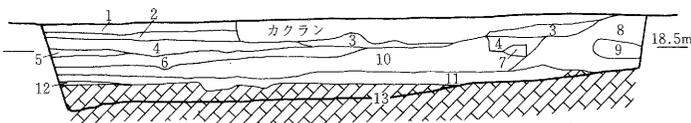
第2トレンチ

- | | | | |
|--------------|---------------|----------------|-----------------|
| 1 暗灰色土 | 6 黄褐色混じり灰色粘質土 | 11 淡黄灰色混じり暗灰色土 | 16 クサリ礫混じり暗灰褐色土 |
| 2 黄橙色土 | 7 " " 粘土 | 12 " " 暗褐色土 | 17 礫混じり暗茶褐色土 |
| 3 淡黄灰色土 | 8 淡褐色混じり黄橙色土 | 13 暗黄灰色混じり褐色土 | 18 褐色混じり灰白色土 |
| 4 淡黄色土 | 9 黄灰白色土 | 14 淡灰褐色土 | 19 礫混じり暗黄灰色砂質土 |
| 5 淡黄色混じり淡灰色土 | 10 淡黄灰色粘土 | 15 暗茶灰色砂礫土 | 20 黄色粘土 |



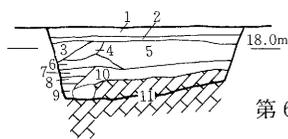
第4トレンチ

- | | |
|-------------|----------------|
| 1 暗灰色土 | 6 黄褐色混じり暗黄色砂質土 |
| 2 灰色混じり黄色土 | 7 クサリ礫混じり暗灰褐色土 |
| 3 " " 黄色粘土 | 8 暗赤褐色土 |
| 4 " " 黄色砂質土 | 9 礫混じり赤褐色土 |
| 5 " " 黄色粘土 | |



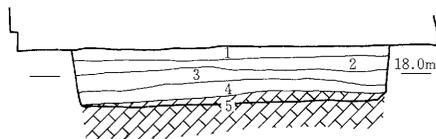
第3トレンチ

- | | | |
|--------------|-----------------|-----------------|
| 1 灰色混じり黄色粘土 | 6 灰色混じり黄色粘土 | 11 暗黄褐色混じり暗灰色粘土 |
| 2 黄色混じり灰色砂質土 | 7 黄褐色砂 | 12 暗灰褐色粘土 |
| 3 黄褐色混じり灰色粘土 | 8 黄褐色混じり灰色粘土 | 13 黄褐色粘土 |
| 4 灰色混じり黄色砂質土 | 9 灰色粘土 | |
| 5 暗黄灰色砂質土 | 10 黄褐色混じり淡灰色砂質土 | |



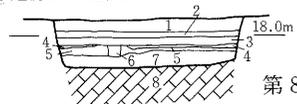
第6トレンチ

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 暗灰色土 | 7 黄色混じり淡灰褐色土 |
| 2 礫混じり暗黄橙色土 | 8 暗灰色砂礫土 |
| 3 " " 暗灰褐色土 | 9 礫混じり暗灰色粘質土 |
| 4 黄色混じり暗灰色土 | 10 " " 黄灰色土 |
| 5 礫混じり暗灰褐色土 | 11 " " 赤褐色土 |
| 6 黄色混じり灰色粘質土 | |



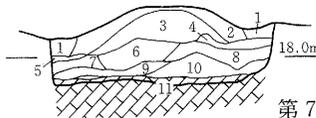
第5トレンチ

- | |
|---------------|
| 1 暗灰色土 |
| 2 暗黄色混じり暗灰褐色土 |
| 3 暗黄灰色土 |
| 4 暗灰色礫 |
| 5 赤褐色砂礫 |



第8トレンチ

- | | |
|--------------|------------|
| 1 暗灰色土 | 5 暗灰褐色砂礫土 |
| 2 褐色混じり暗黄灰色土 | 6 黄灰色砂質土 |
| 3 黄色混じり灰褐色土 | 7 礫混じり黄灰色土 |
| 4 暗灰色混じり黄橙色土 | 8 " " 赤褐色土 |

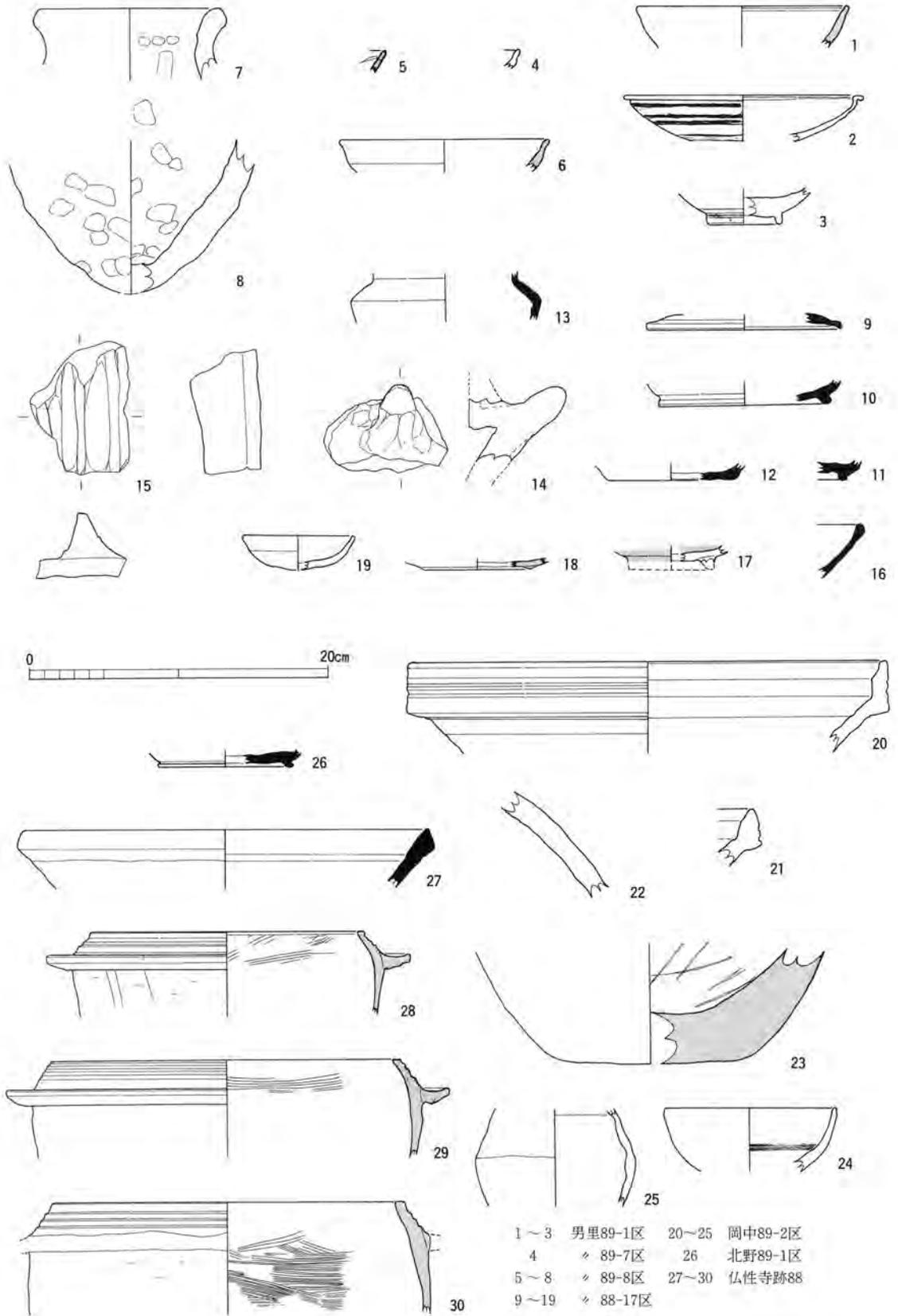


第7トレンチ

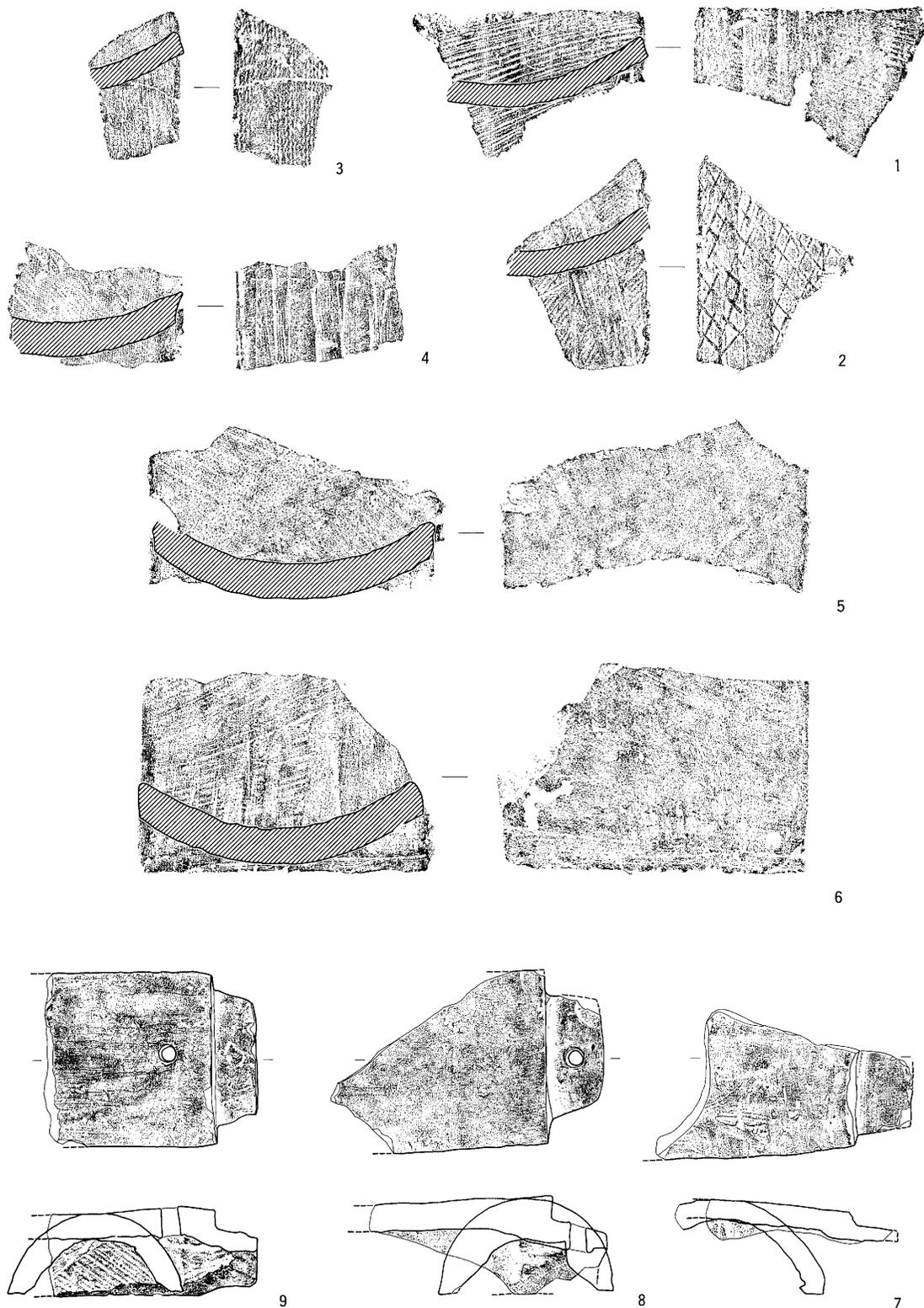
- | | |
|-------------|---------------|
| 1 暗灰色土 | 7 黄色混じり灰色土 |
| 2 灰色土 | 8 " " 淡灰褐色砂礫土 |
| 3 礫混じり暗灰色土 | 9 灰色混じり暗黄色土 |
| 4 黄色混じり灰褐色土 | 10 礫混じり淡灰色土 |
| 5 淡黄灰色土 | 11 礫混じり赤褐色土 |
| 6 黄色混じり淡灰色土 | |



PL. 8 各調査区出土の遺物



- | | | | |
|------|----------|-------|---------|
| 1~3 | 男里89-1区 | 20~25 | 岡中89-2区 |
| 4 | ◇ 89-7区 | 26 | 北野89-1区 |
| 5~8 | ◇ 89-8区 | 27~30 | 仏性寺跡88 |
| 9~19 | ◇ 88-17区 | | |



0 30cm



全景 (南から)



同上 (東から)



89-2区 (東から)



89-3区 (西から)



89-4区 (東から)



89-5区 (西から)



89-6区 (東から)



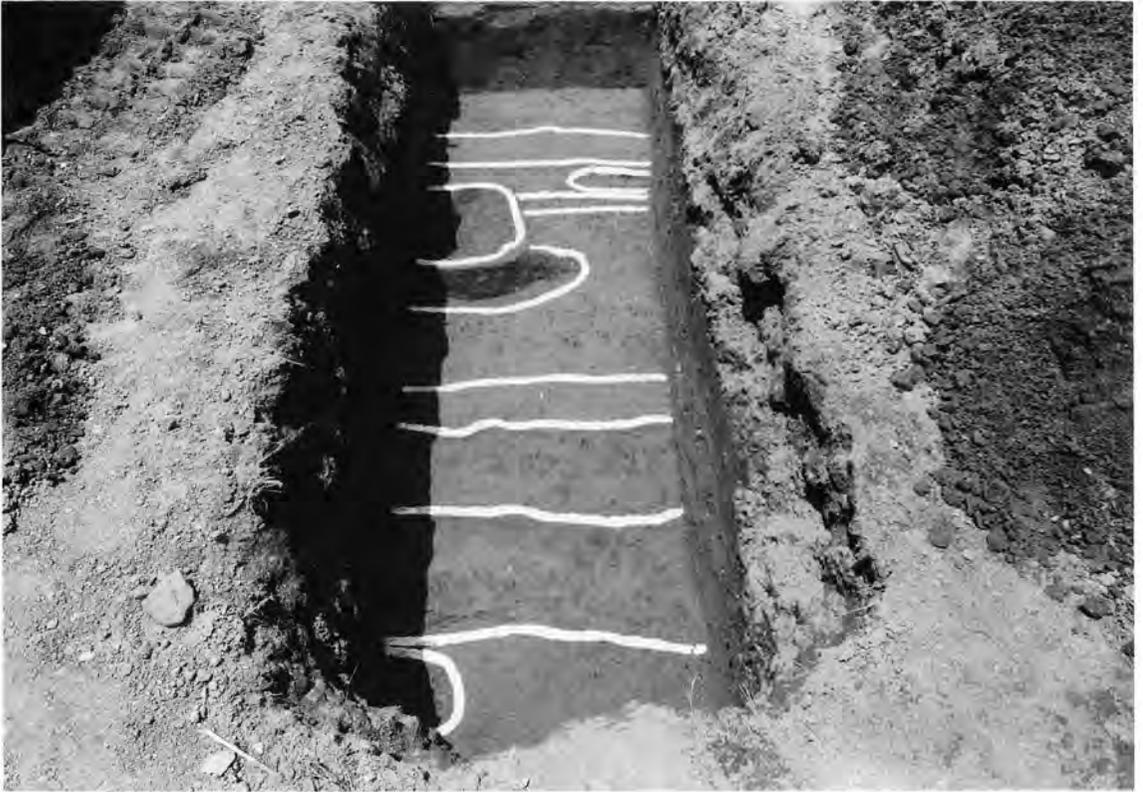
89-7区 (西から)



89-8区 (南から)



89-9区 (北から)



上層（東から）



下層（東から）



東半部 (西から)



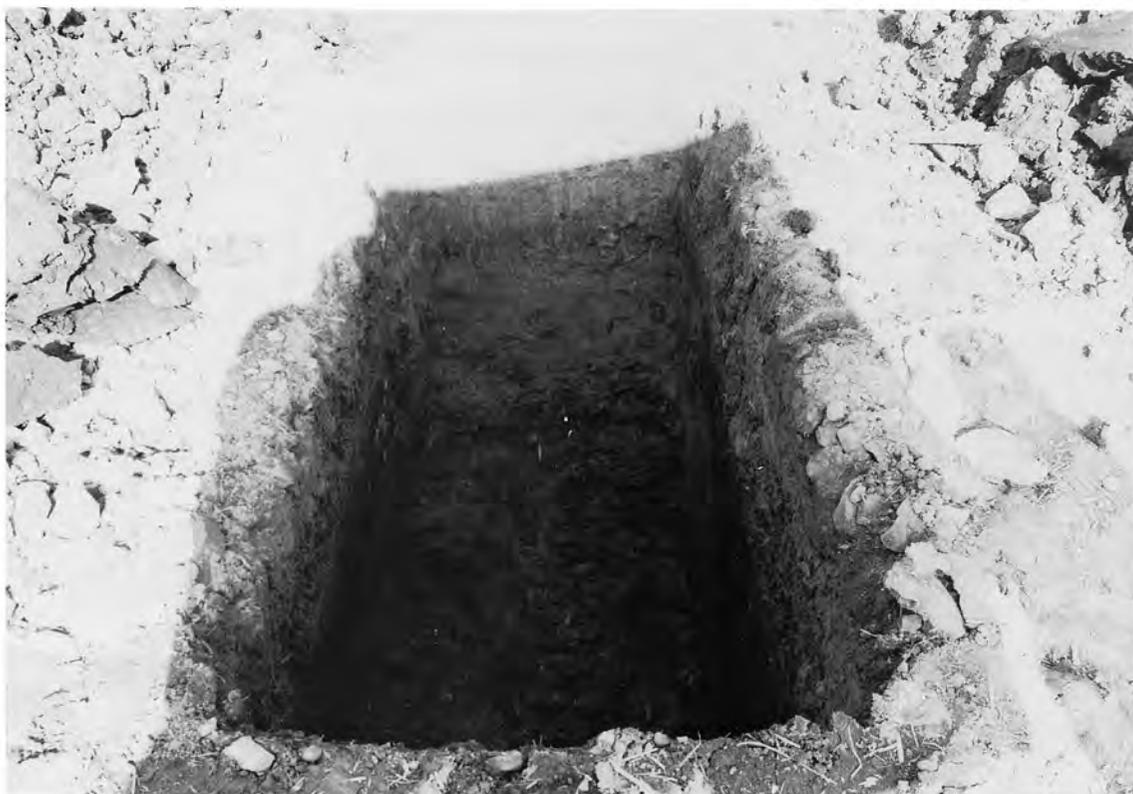
西半部 (東から)



88-16区 (東から)



88-18区 (東から)



89-1区 (南から)



89-2区 (南から)



89-1区 (西から)



89-2区 (南から)



OK88-3区 (南から)



KT89-1区 (西から)



89-1区 (西から)



89-2区 (南から)



KAI 89-1区 (西から)



US 89-1区 (南から)



第1トレンチ (東から)



第2トレンチ (東から)



第3トレンチ (東から)



第4トレンチ (西から)



第5トレンチ (東から)



第6トレンチ (東から)



第7トレンチ (東から)



第8トレンチ (東から)

